

エスニック・スタディーズの始まり ーサンフランシスコ州立大学における学生運動ー

The Emergence of Ethnic Studies :
The Student Protest Movement at San Francisco State College

木村 篤史

序論

1968年11月1日から1969年3月21日にかけて、サンフランシスコ州立大学（当時は「カレッジ」だった。San Francisco State College、以下SFSC）で学生運動が行われた。この学生運動の功績の一つは、アメリカ合衆国（以下アメリカ）で初のエスニック・スタディーズ学部の創設である。サンフランシスコ州立大学の公式ホームページでは、エスニック・スタディーズは以下のように説明されている。

エスニック・スタディーズは、有色人種の人びとの観点から、有色人種の人びと（の生活）を再定義する、教育経験として独自のものである。また、エスニック・スタディーズは、学生、教員、そして、有意義な教育に投資し、大学や一般社会に方策やカリキュラムを提供するコミュニティの人びととの協力的な努力によって成り立つ学問である¹。

現在、アメリカ国内でエスニック・スタディーズに関連する学部学科を設置している大学は62校あり、研究科は11校にのぼる。また、カリフォ

ルニア州では、高等学校の全就学生徒にエスニック・スタディーズの授業を提供する取り決めが進んでいる²。SFSCで誕生したエスニック・スタディーズは、約50年経った現在(2018年)でも、アメリカ全土で学ばれている。

SFSCにおける学生運動を率いたのは、TWLFに所属していたアフリカ系、アジア系、ヒスパニックなど有色人種の学生であった。TWLFは、白人志向の高等教育システムの改革、有色人種の学生の増加、エスニック・スタディーズ学部の創設などを求め、学生運動を起こした。ジョン・ウェイト・パワーズ(John Waite Bowers)は、1960年代にアメリカ国内で行われた学生運動について、大学などの体制側は嫌がらせ(harassment)を用いて学生運動を抑え込もうと試み、その結果学生側が武装化していったことを明らかにしている。一方、SFSCにおける学生運動については、カリフォルニア評議会とのあいだに対立がみられたものの、評議会と交渉を行うことに成功した運動と位置づけている³。

また、ダリル・ジョージ・マエダ(Daryl Joji Maeda)は、SFSCにおける学生運動の評価するポイントとして、①アジア系、アフリカ系、ラティーノの学生が、多人種組織TWLFを構成したこと、②労働者階級の非白人学生が運動の主導権を握ったこと、③第三世界の人々に自由をもたらす道具としての新たな教育の形と知恵を提示したこと、④エスニック・スタディーズを国内で始めて創設したこと、⑤学生が求める教育を行政に訴え、同様の学生運動の機運を大学や高等学校で高めたことをあげている⁴。

また、SFSCにおける学生運動を研究する意義について、権瞳は、他の学生運動が研究されている一方、SFSCにおける学生運動があまり対象とされていないことを明らかにし、以下のように述べている。

当時は連日メディアを賑わせ、全米の関心を集めた紛争であったが、近隣のカリフォルニア大学パークレー校のフリー・スピーチ運動が現在においても有名であるのに比べると、サンフランシスコ州立大学の出来事は、一般の人びとに知られていないだけでなく、あまり直接的な研究対象とはされてこなかった。しかし、この大学紛争の考察を通

して、米国の人種・エスニシティの分野、学生運動研究、あるいは1960年代研究、または高等教育に関わる研究など、多岐にわたる研究領域において、得られる知見は計り知れない⁵。

権が主張するように、SFSCにおける学生運動が行われた背景には、人種、時代背景、教育システムといった複数の要因が混合している。それらが学生運動を起こす要因であったと考えられるが、本論文では学生運動が行われ、成功した要因を、サンフランシスコの都市的特徴である多人種性から明らかにする。特に、サンフランシスコに存在する有色人種コミュニティの学生運動の参加と運動において果たした役割に焦点を当てる。

先行研究

マエダは、SFSCにおける学生運動がサンフランシスコの特徴である、多人種、多民族性が大きく関わっているとしている。そして、サンフランシスコの人種、民族を再確認することで、学生運動の要因が明らかになると主張している。また、マエダは、1960年代前後のサンフランシスコにおける人種別人口割合と、SFSCの人種別学生割合を比較し、サンフランシスコの有色人種人口が増加している一方、SFSCの白人の割合が有色人種よりも高い点に注目している。また、サンフランシスコの人種別人口割合と、SFSCの人種別学生割合を比較すると、サンフランシスコの有色人種人口が増加しているのに対し、SFSCでは白人の数が多くなることがわかる。マエダは、これに対し、有色人種の学生が人種的な過小評価を受けているように感じていた、としている⁶。有色人種コミュニティが数多く存在するサンフランシスコの都市的特徴は、学生運動が起きた要因の一つであると考えられる。しかし、この点だけを学生運動の発生要因としてとらえるのは疑問がある。SFSCにおける学生運動は、サンフランシスコの多人種、多民族といった都市的特徴だけではなく、1960年代という時代背景や当時の州立大学がおかれた状況も加味する必要があると考えられる。

方法

学生運動全体の研究史は、*SFSC Student-led Strike Materials in the University Archives* を参考にする。この電子アーカイブには *Special Collections and Archives - Strike Documents* や *San Francisco Bay Area Television Archive - Strike Videos* が含まれている。また、TWLF による声明文、大学への要求書、学生運動への参加の呼びかけを目的とした TWLF や「コミュニティ」によるポスターが入手できる。ビデオアーカイブには KPIX 放送のニュース番組 *Eye on the Bay News* による、学生運動に関する報道や会見、インタビューが保存されている。これらを利用することで運動全体の流れと当事者の意識を確認することができる。学生運動当時に発行されていた SFSC 学内紙 *the Daily Gator* や *Phoenix* やカリフォルニア州内で発行されていた新聞には、運動参加者のインタビューや TWLF の声明が掲載されており、こちらも使用する。

章立て

第一章では、1960 年代のアメリカ国内外の社会運動を改めて考察する。そして、SFSC における学生運動と国内外の社会運動との関連性を明らかにする。特に、学生運動に影響を与えたと考えられる、公民権運動やベトナム反戦運動、そして、学生非暴力調整委員会 (Student Nonviolent Coordinating Committee、以下 SNCC) やブラック・パンサー党 (Black Panther Party) など、外部組織との関係、それらからの影響を明らかにする。

第二章では、サンフランシスコの特徴である多人種性に焦点を置く。特に、1940 年代からのサンフランシスコの人口の増減や、白人と有色人種の人びとの割合を数値的なデータから分析する。サンフランシスコの有色人種の人びとの割合や SFSC の有色人種の学生の割合を分析することで、学生運動に関わった有色人種の人びとや学生が、サンフランシスコや

SFSCにおいてどのような立場におかれていたのかを明らかにする。

第三章では、学生運動の全体的な流れを通し、学生運動と有色人種コミュニティの関係に焦点をおく。学生運動は、エスニック・スタディーズの創設が代表的な動機となっている。しかし、TWLFは、学内外の有色人種の人びとがおかれた状況も考慮し、体制側に「コミュニティ」の状況を訴え、要求をした。学生運動と「コミュニティ」の関係性について考察することで、当時の有色人種の人びと、そして、「コミュニティ」の状況も明らかになる。

第四章では、有色人種コミュニティの、学生運動に対する考え方を考察する。特に、日系人コミュニティは、学生運動をめぐる賛否が大きく分かれた。この対立の要因となったのは、学生運動中に学長代行に就任し、学生運動を弾圧した、日系アメリカ人二世サミュエル・イチエ・ハヤカワ (Samuel Ichiye Hayakawa) の存在である。ハヤカワは、学長として当時のカリフォルニア州知事や評議会から評価され、その期待に答えるように学生運動終息に向けて動いた。しかし、日系人コミュニティの中には、日系人学生と学生運動を支持する二世や、ハヤカワの支持から学生運動の支援に回った人もいた。その結果、日系人コミュニティ内のハヤカワ支持は低下した。日系人コミュニティだけではあるが、有色人種の人びとによる、学生運動の考え方を考察することで、有色人種の人びとの社会状況やそのとらえ方の違いも明らかとなる。

第一章 1960年代の世界とアメリカ学生運動の始まりー

SFSCにおける学生運動は、1968年11月から翌69年3月にかけて行われた。その背景には、同大学大学院生で非常勤講師も務めていたアフリカ系アメリカ人学生、ジョージ・メイソン・マレー (George Mason Murray) の解雇があった。アフリカ系、アジア系、ヒスパニックなど、有色人種の学生組織は、マレーの再雇用を訴え、加えてエスニック・スタディーズの学部創設を求めた。アメリカで最も長期的に行われたSFSCにおける学生

運動は、国内初の正式なエスニック・スタディーズ学部を創設した⁷。

SFSCで学生運動が行われた「1968年前後」は、アメリカだけでなく、フランスやドイツ、日本など、世界的に社会運動が起きた時期であった。西田慎、梅崎透は、近年、歴史学の研究対象になりつつある「1968年」について、資本主義国だけでなく、社会主義国においても、同時多発的に若者や学生による反乱、社会運動が起きた時期であるとしている⁸。そして、現在までに続く「グローバリゼーション」が始まった、注目すべき時期として以下のように述べている。

「1968年」は、世界規模での学生運動が行われた時期で、1968年前後は世界規模で社会の変革を求める運動が起こった年であり、国境を越えた政治活動、さらには文化や情報を含む現在進行するグローバリゼーションの起点であり、たまたま同時に起こったのではなく、起こるべくして起こった⁹。

「1968年前後」は、アメリカにおいても学生運動が活発に行われた時期だった。学生運動だけではなく、他の社会運動も同時期に展開した。「1968年前後」はアメリカが大きな変化を遂げた時期であった。

アメリカの1960年代、1920年代に起こった世界恐慌から回復し、さらなる経済発展を遂げ、物質的な「豊かさ」を手に入れた時期である。SDSの初期の指導者で、ニューレフトのリーダー的存在だった、社会学者トッド・ギトリン (Todd Gitlin) は、自身の回顧録的60年代論『60年代アメリカー希望と怒りの日々』の中で、戦後のアメリカの繁栄を以下の様に述べている。

大不況時代は去った。第二次世界大戦の傷も癒された。いやむしろ、戦争は恵の神ですらあった。ヨーロッパや日本の工場が潰滅した時にアメリカでは新しい工場が次々と建ち、古い工場は民需に復帰し、失業は減少してほとんど無視できるくらいになった。戦争が終わるや、消費者の要求は一気に高まった。科学技術は産業に動員され、資本は前と違って政府主導でどんどん投下された。社会的繁栄が始まり、つい先程まで戦争の悲惨の思い出があっただけに、安堵の思いが豊穡の

小槌から振り出される豊かさを一層際立たせて見せつけた¹⁰。

第二次世界大戦中のアメリカは、本土が戦場にならなかつたうえ、戦時中の経済の急速な拡大、原子力、航空機、石油化学、電機など、新しい分野での技術革新が進行した¹¹。技術革新が進むにつれ、経済発展期に突入したアメリカは、経済的な「豊かさ」を享受した。そして、市民は安定した社会の中、物質的なモノの「豊かさ」を享受するようになった。市民的な「豊かさ」の例として、安価な一軒家、自動車、ベビーブームが挙げられる¹²。アメリカ各地の郊外には、「レヴィットタウン (Levitt Town)」と呼ばれる、一戸建て建売住宅の団地が作られ、戦中からの住宅需要に応えた。レヴィットタウンなど、安価な一軒家の出現に伴い、白人中産階級の郊外化が進んだ。郊外で暮らす人々は、都市部への移動手段として、マイカーが必需品となった。マイカー所有率の上昇に伴い、アメリカ各地の道路の整備が行われ、1956年の国道助成法により、超高速道路網の建設が開始された。これにより、アメリカ国内の交通整備が着々と進んでいった。

経済的に余裕のある中産階級家庭では、子供の教育にも金銭的投資を行うようになった。戦後、G. I ビルにより復員兵の大学進学率が上昇したように、出生率が大きく上昇した1945年から53年生まれのベビーブーム世代は、戦後の大学進学率の上昇を継続させた。この当時の子供は、「経済成長を支える市場、経済成長の誇るべき成果、経済成長の最先端に突出した部分」であったとギトリンは述べている¹³。アメリカは、戦争の被害を受けず、国土が広く、自信にあふれ、消費財をいまだかつてないペースで獲得した。そして、50年代後期から60年代にかけて、経済は最盛期を迎えた。

しかし、アメリカ国内の社会運動は、豊かさを享受するアメリカに内在する、冷戦、貧困、人種的抑圧、伝統的家族観、画一的文化といった矛盾を可視化させた¹⁴。梅崎は、1960年代のアメリカにおける初期の学生運動は、核や共産主義などへの「恐怖感」から始まったとしている¹⁵。そして、この「恐怖感」から始まる1960年代のアメリカ国内の学生運動は、SFSCにおける学生運動にも影響を及ぼしている。

梅崎のいう1960年代の「恐怖感」を表す代表的なものは、「赤狩り」である。1950年代のアメリカでは、冷戦や共産主義への不安を感じた市民が、共和会上院議員ジョセフ・マッカーシー (Joseph McCarthy) 上院議員の押し進める「赤狩り」に賛同した。これにより、共産主義者としてでっち上げられた政府機関や軍関係者、アメリカ共産党員、映画産業関係者は打撃を受け、多くの人々が職を失うこととなった。「赤狩り」に対し立ち上がったのは、学生であった。1958年春、SFSCの対岸に位置するカリフォルニア大学バークレー校 (University of California, Berkley、以下UCB) では結成されたスレイト (Slate of candidate) が結成された。スレイトは、赤狩りの舞台となった下院非米活動委員会 (House Un-American Activities Committee、以下HUAC) の公聴会に対し、反対デモを行った¹⁶。また、UCBではフリー・スピーチ・ムーブメント (Free Speech Movement) が実施され、60年代の学生運動の中心的な存在となった。1962年6月には、「参加する民主主義 (Participatory Democracy)」を主張して幅広く活動したSDSが、ギトリンを中心として結成されたが、その活動は北爆、ジョンソン大統領による「選抜徴兵制 (selective service system)」の発表により、急速に拡大した。

SDSは、1960年代のアメリカにおける「新左翼 (New Left)」を代表する組織であった。「新左翼」とは¹⁷、戦後のイギリス知識人等による、支配者層への敵意と伝統的慣習への反感によって生まれた「社会主義ヒューマニズム」を追求する思想を体現していた。しかし、アメリカで波及した新左翼には、赤狩りで疲弊していた共産党の影響はほとんど無く、体制内化した労働運動や社会民主主義左翼との対比の中で見出された。

SFSCの学生運動に影響を与えたと考えられる組織は、1960年にノースカロライナ州で始まった「座り込み (sit-in)」とSNCCの結成である¹⁸。この運動は、ノースカロライナ州グリーンズボロのレストランに併用された、白人専用のランチカウンターに座った黒人学生が、白人と同等の待遇を受けられないことに反対し、座席に座り込むことから始まった。この様子が報道されると、「座り込み」はアメリカ各地で行われた。白人暴徒に

よる嫌がらせや暴行を受け、逮捕者を出しながらも非暴力を貫くこの動きは、メディアを通じて全国に広がり、南部の人種隔離の不合理性を改めて浮き彫りにした。「座り込み」運動を通して結成されたのが SNCC だったが、この組織は SFSC の黒人学生に「ブラック・パワー (Black Power)」の思想を植え付けた。

SNCC は、南部黒人の有権者登録運動である、フリーダム・サマー運動 (Freedom Summer Movement) などで成果を上げ、公民権運動を代表する急進的組織として注目された。SNCC は、黒人差別撤廃を求めて結成された組織であったが、リベラルな白人からの支援を受け、1964 年までに白人会員は半分にまで増加した。しかし、若年層のメンバーは、人種問題解決の進展の遅さにいらだち、より急進的な立場をとるようになった。そして、黒人市民の有権者登録をミシシッピ深南部で展開した。「フリーダム・サマー運動」では、全米から多くのボランティアが参加した。この運動を体験した学生は、後にそれぞれの大学に戻り、それぞれの運動を展開した。SFSC における学生運動においても、SNCC からの影響が見られるが、特に代表的な人物は、ストークリー・カーマイケルである。「ブラック・パワー」を提唱したカーマイケルは、後の SFSC における学生運動期間中に演説を行っている。また、黒人学生同盟 (Black Student Union、以下 BSU) を率いた、ジミー・ギャレット (Jimmy Garrett) は「ブラック・パワー」の影響を強く受けている。

ビキニ環礁で示した核兵器、マッカーシズムや赤狩りが示したような共産主義への恐怖、第二次世界大戦やアウシュビッツといった大殺戮など、実際に体験していないからこそ生まれる恐怖を、親世代が体験した第二次世界大戦を振り返ることで実感していた。アメリカにおける初期の学生運動の要因となったのは、豊かな社会に潜む、共産主義や冷戦、核兵器に対して生まれた「恐怖感」であった。そして、これらの「恐怖感」から発生した 1960 年代のアメリカの学生運動は、新しい思想を生み出し、新左翼を掲げる組織や「ブラック・パワー」を掲げる組織が誕生した。これらの組織は、1960 年代後半におこなわれる SFSC の学生運動に影響を及ぼした。

「1968年前後」に起こった学生運動は、共産主義や核兵器といった要因だけではない。梅崎は、経済学者 J・K・ガブレイス (J K Galbraith) が指摘したように、1960年代頃に白人中産階級が「豊かさ」を求めた一方、人種、階級、ジェンダー、により排除された人々の存在が大きく関係しているとしている¹⁹。そして、「マイノリティ」の人びとによる、1950年代から60年代の運動は、「1968年前後」に起こる学生運動にも影響した。

アメリカの学生運動において、特に大きく影響を及ぼした社会運動は公民権運動である。芹沢功は、学生運動とベトナム戦争、黒人公民権運動との繋がりについて、以下のように述べている。

1960年代のアメリカの学生運動には種々の性格が含まれているが、直接青年を政治運動に駆り立てている条件は何といってもベトナム戦争である。[中略] この直接的な動機はかつてなかった政治不信、大学を含む既成社会への不信の思想と行動を生成させた…。[中略] その思想と行動を拡大させている基礎としては黒人運動を並行して見て行く必要がある²⁰。

公民権運動に参加した若い世代は、ベトナム戦争への米軍の介入は短期間で終わると予測していた。しかし、それがなかなか終わらなかったため、本格的な反戦運動を行うようになった。1964年8月のトンキン湾事件や翌65年2月の北爆は、当時実用化されたテレビの衛星中継によって世界中に広まり、国内外の反戦ムードをさらに推し進めることになった²¹。ベトナム戦争の実情を知った多くのアメリカ市民は、さらに反戦への意欲を強めたが、反戦運動の中心には、戦後に生まれたベビーブーム世代の若者たちがいた。彼らは「豊かな社会」の中に潜む恐怖を感じ取り、それまでの公民権運動の影響も作用し、大学を拠点に、ベトナム反戦を掲げた学生運動を展開した。1965年4月14日に、SDSを中心として、ワシントンD.C. でベトナム反戦の行進が行われ、同年5月21日から23日にかけて、UCBでは大規模なティーチ・イン (Teach-in) が開催されたが、その参加者は3万人にのぼった。1960年頃に青年期をむかえたベビーブーム世代の若者たちが、「豊かな社会」の中に存在する、矛盾や不平等を認識し、公民権

運動などの社会運動に参加して差別を直視したことがわかる。そして、若者たちは、公民権運動を通し、社会運動の組織構成や過程を経験的に学び取った。また、ベトナム戦争などのアメリカの帝国主義的外交政策に対する不満も絡み合い、「1968年前後」に学生運動が活発化した。

この、「1968年前後」の学生運動の様々な要因は、SFSCのあるサンフランシスコにおいても見られたが²²、特に公民権運動は影響力を持っていた。SFSCで学生運動が行われる1968年以前から、サンフランシスコに住む有色人種の人びとは、経済的な不平等に対し取り組みを行っていた。SFSCでは、学内のフリースピーチゾーン (Free Speech Zone) の創設やHUACに対する抗議デモが行われた。また、学生活動家は、学生自治会の資金をコミュニティの子供や移民者を対象とした「チュートリアル・プログラム (Tutorial Program)」に使用した。他にも、労働組織のストライキをギャングと共にサポートするなど、SFSCの学生は学外の運動に参加していた。学外での活動は、主に非白人居住区のフィルモアやチャイナタウン、ミッションなどで行われていた。そして、これらの活動は、貧困家庭の学生への融資などを行う「コミュニティ・インボルド・プログラム (Community Involved Program)」と呼ばれるプログラムへと発展した。このように、地域に根差したプログラムがSFSCには学生運動以前から存在しており、のちの学生運動は「コミュニティ」と関連をもっていたとも考えられる。

SFSCにおける学生運動からも、公民権運動の影響を見て取れる。学生運動を展開したTWLFは、複数の有色人種学生組織から結成されたが、TWLFの母体となったBSUは、「ブラック・パワー」を掲げるSNCCからの影響を強く受けていた。BSU議長ジミー・ギャレットは、SNCCのメンバーであった。ギャレットは、SNCCのコーディネーターとして南部で活動しており、SFSCの黒人学生には、政治的な関心を持たせる目的があった。そして、SFSCに存在していた「実験的大学 (Experimental College)」という制度に目を付け「ブラック・パワー」の普及を図った。

「実験的大学」とは、教員の資格が無い者でも、講師として授業を受け持つことができる制度で、当時は、学生や社会運動家、芸術家などが講師

となり、独自の授業を展開していた。「実験的大学」制度を通し、BSUは「ブラック・パワー」や黒人文学など、黒人に関する学問を独自で展開した。1967年3月には、黒人に関する学問を発展させるため、サンフランシスコ州立大学に対し、ブラック・スタディーズ学部設立の要求が提言された。これは実現されなかったが、ギャレットは学長ジョン・サマースキル (John Summerskill) との間で、ネイサン・ヘア (Nathan Hare) の雇用を確保することに成功した²³。

ギャレットを中心として、BSUはTWLF結成以前から活動をしていたが、さらに注目しておきたいのは、ジョージ・メイソン・マレー (George Mason Murray) とチュートリアル・プログラムである。このプログラムは、ボランティアによる勉強会のような活動であったが、他の有色人種も行なっていた。しかしBSUは、この活動でも、独自の黒人的学問の普及を考えていた。そこで名前が挙げたのが、大学院生でブラック・パワーの影響を強く受けていたマレーだった²⁴。1968年、マレーはブラック・スタディーズのチュートリアル・プログラムのディレクターを務めており、「黒人意識 (Black Consciousness)」に関する授業の担当者として想定されていた。一般社会にブラック・パンサー党が知れ渡るにつれて、マレー自身も革命的ナショナリズムに浸透し、第三世界の人々による結束の重要性を強調した。そして、1968年8月にはキューバに渡り、アジア、アフリカ、南米の革命派による結束と、ブラック・パンサー党とベトナムゲリラの自由のための結束を主張した。

過激な思想を持っていたマレーの発言からは、ブラック・パワーの思想が見て取れる。例えば、過激な発言をくりかえすマレーは、SFSCの非常勤講師を解雇されることになるが、当時のSFSC学長ロバート・スミス (Robert Smith) は、マレーの解雇を要求する評議会と対立していた。1968年10月24日、フレズノ州立大学で行われた評議会の定例会で、評議長グレン・ダムケ (Glenn Dumke) は、再度スミスにマレーを解雇するように命令した。しかし、マレーは、自らフレズノ州立大学に赴き、会議が行われている校舎の前で以下のようなスピーチをしている。

我々は政治的な力は銃身によって達成されると主張する。もしも、学内での自治権がほしいのならば、学生が大学の運営権を欲するのならば、白人野郎の管理者たちがそんな一か八かのことをしながらないのならば、銃を持って支配せよ。我々は奴隷であり、自由になる唯一の方法はすべての奴隷主を殺すことである²⁵。

このマレーの発言からは、白人に対する抵抗として、武装化することを主張しており、ブラック・パワーの影響を強く受けていることがわかる。SNCC や公民権運動の活動に関わっていたギャレットや、ブラック・パワーからの影響を強く受けたマレーのような人物が、SFSC の学生運動の中心にいたことで、公民権運動の影響を受けていたと考えられる。しかし、実際の SFSC における学生運動では、学生による武装化は見られず、平和的であるが、「コミュニティ」やサンフランシスコ市全体を巻き込んだ運動として、大規模で長期的な運動へと発展していった。

1960 年代にアメリカ国内外で学生運動が行われた理由、背景は明らかになった。しかし、SFSC における学生運動には、それら以外の要因もあると考えられる。SFSC における学生運動を通し、TWLF を始めとする学生組織は体制側に様々な要求を呈する。それらの中にも、公民権運動からの影響や、それ以外の影響を見ることが可能であると考え。第三章では、これを集中的に考察し、特にサンフランシスコ市における有色人種コミュニティに焦点を当てる。

第二章 サンフランシスコの人種的多様性

第一節 サンフランシスコにおける人口増加と人種構成

サンフランシスコの人種的多様性は、1960 年代頃に急速に進んだ。1960 年代の西海岸はアメリカ東部、南部、中西部などの地域とは比較にならないほど、多様な人種、民族が混在していたという²⁶。そして、1960 年代のサンフランシスコには、様々な有色人種コミュニティが点在してい

た。アフリカ系はミッション地区やサンフランシスコ湾対岸のオークランド、中国系はサンフランシスコ中心部に位置するチャイナタウン、日系はサンフランシスコ中心部から少し離れた日本町など、各人種、民族がそれぞれに中心的なコミュニティを構成していた。サンフランシスコ市の人口は1940年以降に大幅に増加するが²⁷、この人口増加の要因の一つは、有色人種を含む移民の増加が関係している²⁸。有色人種の人口増加は顕著であり、それを示すように白人の人口割合は一時期を除き低下している。

湾岸地域行政組合 (Association of Bay Area Governments) による人種別人口統計によると、1940年は、サンフランシスコの人口のほぼすべてを、白人が占めていた。1950年になると、黒人に加え、ヒスパニックや中国系、日系が人口統計に数えられるようになり、白人の人口割合は約10%減少している。学生運動が行われた1960年は、白人人口が増加しているが、これは第二次世界大戦後のベビーブームの影響もあったと考えられる。しかし、白人の割合が増加したとはいえ、黒人、中国系や日系といったアジア系の人口も増加しており、インド系やフィリピン系もこの時から統計にあらわれている²⁹。1970年以降も白人の人口割合は減少し続け、アジア系やヒスパニックが台頭している。

マエダによると、このような数値には現れていないが、サンフランシスコにおける若者の人口比率は、有色人種が半数以上を占めていたという³⁰。これらのことから、サンフランシスコの人種的多様化は1950年頃からすすんだと考えられ、現在のサンフランシスコの人種、民族的な多様性が始まったと考えられる。

第二節 サンフランシスコ州立大学の歴史と人種

1950年代以降、サンフランシスコが多様な人種、民族で構成される「国際都市」になりつつある一方、学生運動が始まった1968年のSFSCは、人種的な多様化がされているとは言い難かった。これは、学生運動を起こした有色人種の学生が危惧した問題であり、学生運動が行われた要因の一つ

でもある。そして、人種的多様化の沈滞は、州教育委員会も危惧していたことであった³¹。ここでは、現サンフランシスコ州立大学（現在は「カレッジ」ではなく、「総合大学」[university]である。San Francisco State University)の歴史のなかの有色人種の人びとに焦点を当て、学生運動に至るまでの有色人種の学生との関係性を明らかにしていく。

SFSCは、1899年に女性教員を育成するサンフランシスコ師範学校(San Francisco Normal School)として創設された。メレディス・エリアッセン(Meredith Elliassen)による、サンフランシスコ州立大学の大学史San Francisco State Universityには、1899年の創設から2007年までの歴史的記録が収められている³²。本書には、SFSC創設当時のからのキャンパス風景や学生の集合写真が収められているが、創設当時の1900年代から1920年代のSFSCの集合写真からは、大半の学生が白人であったことがわかる。これは、アジア系などの有色人種の人びとの移民初期であったことを考慮すると必然的である³³。

SFSCは、創立当初からジェンダー的にリベラルな大学であった。初代学長フレデリック・L・バークは、「教員という職業を通し、女性に経済的に知的な独立を得て欲しい」という考えを持つリベラル派であった³⁴。これを表すように、バークは積極的に大学内の教職員に女性を雇用し、女性職員の数は大学職員全体の3/4にのぼっていた³⁵。

1920年、カリフォルニア州立大学機構に加わると、名称に「州立(state)」が付け加えられ、「サンフランシスコ州立師範学校(San Francisco State Teachers School)」となった。ノーマル・スクールとティーチャーズ・スクールは、共に「師範学校」と訳される。この二つの違いは、教員養成コースの期間であり、ノーマル・スクールは2年制、ティーチャーズ・スクールは4年制の教員養成コースを設置していた。州立大学機構に加わったことで、設立当時からの「師範学校」という、「職業大学」としての役割だけでなく、現在までに続く、様々なカリキュラムを備えた大規模総合大学へと徐々に変革が行われた。

1935年には教員養成コース以外のプログラムも設置された本格的な「州

立カレッジ (State College)」の一つとして、「サンフランシスコ州立カレッジ (San Francisco State College)」となった。学生運動が行われた 1960 年代までに、66 の学士課程と 44 の修士課程を備えた、学生数約 18,000 名の大規模総合大学となっていた。現在は、「カレッジ (College)」ではなく「総合大学 (University)」として「サンフランシスコ州立大学 (San Francisco State University)」となり、8 つの学部と 6 つの研究科を備える学生数約 30,000 名 (学部生 26,906 名、大学院生 3,350 名) に及ぶ、大規模総合大学として存在し続けている。SFSC における 2015 年の人種別学生割合は、アメリカ先住民・アラスカ系先住民 1%、アジア系 27%、アフリカ系・黒人 5%、ヒスパニック 29%、ハワイ系先住民・太平洋諸島出身者 1%、白人 20%、混血 6%、複数国籍所持者 7%、回答無し・不明 6% となっており、多様な人種の学生いることがわかる。SFSC の人種的多様性は、様々な人種や民族が共存するサンフランシスコという国際都市の特徴を反映していると考えられる³⁶。

サンフランシスコ師範学校が創設された当初のキャンパスは、サンフランシスコ中心部のメインストリートであるパウエル通り沿いに設置された。しかし、このキャンパスは 1906 年のサンフランシスコ地震により全壊した。現在のキャンパスは、ゴールデン・ゲート・ブリッジやフィッシャーマンズ・ワーフなど観光名所が密集するサンフランシスコ市中心部から、地下鉄で 30 分ほど離れた住宅街の中に位置している。94 エーカーのキャンパスには、約 20 棟の学舎と図書館、テニスコート、野球場、フットボール場、学生寮などが備えられている。実際にサンフランシスコ州立大学を訪れてみると、キャンパス周辺には中産階級の居住者が多いように見られた。学生運動のあった 1960 年代頃のキャンパス周辺は、白人中産階級の居住区が大半を占めていたが、徒歩 3 分ほどの距離には最貧困居住区もあったという³⁷。

サンフランシスコという都市に位置していることで、SFSC はサンフランシスコという国際都市の特色に影響を受けたと記したが、キャンパスの位置が学生運動に大きく作用しているとは考えにくい。しかし、学生運動

は SFSC のキャンパスだけではなく、市中心部、さらにはベイエリアを巻き込んで行われており、学生運動を地理的に広くとらえ考察することが必要である。

SFSC は、教員育成の「職業学校」として、1920 年代頃から有色人種の入学を許可していた。残存しているもっとも古い記録によると、1922 年に中国系アメリカ人のアリス・フォン (Alice Fong) が入学している³⁸。フォンは、学部生として入学したが、英語と中国語のバイリンガルであったため、卒業後パブリック・スクールで講師として採用されている。また、同じ時期には、アフリカ系アメリカ人学生の入学も見受けられる。グレース・ハケット (Grace Hackett) は、1925 年に入学した黒人女子学生の一人で、幼児教育を専攻していた³⁹。卒業後は、カリフォルニア州トゥーレアリの黒人コミュニティで教師として勤めていたという。男女共学となった 1931 年以降、中国系、日系、韓国系、フィリピン系の学生による「オリエンタル・クラブ (Oriental Club)」が結成されたという記録も残っている⁴⁰。このクラブの活動の詳細は不明であるが、サンフランシスコの国際化に関係する活動を行っていた。エリアッセンによると、このクラブに所属していた、オリーブ・トンプソン・コーウェル (Olive Thompson Cowell) は、1919 年から 55 年にかけて SFSC において国際関係学を教えおり、1933 年の国際関係学部創設に尽力したと記されている⁴¹。これらのことから、SFSC の創設当初は、有色人種の学生数はわずかであったことが予測される。これも、サンフランシスコが多人種、多民族化される以前のことであると考えられるため、必然的にとらええられる。

有色人種学生が、SFSC の記録の中に目立つようになったのは 1940 年代から 50 年代以降である。この時期は、第二次世界大戦前後のベビーブームの影響で学生数が 10 年間で約 120 万人増加した時期であり、60 年代を迎えると高等教育進学者数は 350 万人を超える⁴²。それを考慮すると、有色人種の人種別学生割合は、白人学生には及ばなかったと考えられるが、学生数は増加している。*San Francisco State University* の中にも、それを証明するものが残されている。1950 年から 60 年代の写真の中には、アメリ

カンフットボール選手“リトル・ジョー”バーダッチ(“Little Joe” Verducci 1910-1964)の活躍を記念して1959年に“バーダッチ”寮が建設された時の写真がある⁴³。この建設完成祝賀会には、当時のSFSCのアメリカンフットボールチームのメンバー写真が収められているが、その中の多くは黒人学生である⁴⁴。エリアッセンは、「大学の理念は、ベイエリアの多様なコミュニティが生み出した独特の感性を反映している」として、SFSCが多様な人種コミュニティに根付いた大学であることを評価している⁴⁵。また、学生運動中の1969年に学長代行に就任し、学生運動の鎮圧を図ったサミュエル・イチエ・ハヤカワは、1955年に言語学教授として就任している。1963年には、インターナショナル・ウィーク(International Week)として、様々な国や文化の芸術を発表する行事が行われており、この時点ではアジア系が最大のマイノリティ・グループであったという⁴⁶。

サンフランシスコで有色人種人口が増加した1960年代であったが、SFSCは有色人種の学生が増えたものの、学生割合は白人には到底およばなかった。学生運動が行われた1968年秋学期の記録によると、約18,000名の学生のうち、75.9%が白人学生で、黒人5.3%、アジア系7.9%、フィリピン系1%、ラティーノ2.3%、ネイティブ・アメリカン0.5%と白人が圧倒していた⁴⁷。マエダは、「有色人種学生にとって、この惨めな数字は、ゴールデン・ステイト(カリフォルニア州の愛称)の高等教育に政治が関与していると理解されたに違いない」と述べており、有色人種は学生割合の低さから高等教育における人種的差別を感じていたとしている⁴⁸。

しかし、この有色人種学生の割合は、当時のアメリカ国内では比較的高かった。1956年、SFSCの副学長として就任したドナルド・ガリティ(Donald Garity)は、就任当時の学内の様子について、有色人種の多さを明らかにして、以下のように述べている。

私は、いままでに見たことがないくらい多くの黒人学生を教室内で見た。(黒人が)10%以下の教室を見たことがない。おそらく(教室内の黒人は)20%くらいだろう。1956年の学内の教室は非常に驚くべきところであった⁴⁹。

ガリティの証言からは、1950年代のSFSCは有色人種の割合が比較的高かったと予想される。そして、サンフランシスコがアメリカの他の都市に比べ、人種の多様化が進んでいたことを反映していると考えられる。1950年代以降のサンフランシスコは、有色人種人口が増加し、白人の人口割合が下がった。しかし、サンフランシスコの有色人種の人びとが増加する一方、SFSCでは1960年ころから有色人種の割合が減少することとなり、サンフランシスコの人種的多様化と逆行した現象が起こった。これが、学生運動を起こす要因となったとする者もいる⁵⁰。しかし、有色人種学生減少の原因の一つと考えられている、カリフォルニア州教育委員会によって実施された、「カリフォルニア高等教育マスター・プラン」(A Master Plan for Higher Education in California、以下マスター・プラン)は、確かに有色人種の学生を非人種差別的に減らす役割を果たした。

第三節 マスター・プランと有色人種の学生減少

1960年、カリフォルニア大学バークレー校の総長を務めていたクラーク・カー(Clark Kerr)を代表として、マスター・プランが実施された。この政策が実施されるとともに、有色人種学生が減少することとなるが、まずはこの制度について説明をしたい⁵¹。

マスター・プランは、1950年代の学生増加に備え、カリフォルニア高等教育のシステムが万人に開かれたアクセスを保証する、民主的制度の保持を目的として実施された⁵²。しかし、実際にはカリフォルニア大学(University of California、以下UC)における従来の「エリート」としての位置と質、資金を守ることが目的であった⁵³。そのため、大学入試のレベルもそれ以前に比べて困難なものとなり、徹底的な学力上位者の選出を図った⁵⁴。マスター・プランは、高等教育への進学を希望する高等学校の生徒が受ける共通テスト「大学進学適正試験(Scholastic Aptitude Test、以下SAT)」のスコアを利用し、入学制限を行った。SATスコアの上位12.5%がカリフォルニア大学群(University of California)、33.3%

が州立大学群 (State College) への出願が許された⁵⁵。それ以下のスコアの者には、短期大学群 (Community College) への進学しか残されていなかった。しかし、短期大学は州内の居住者であれば全員に入学が許可されていたため、高等教育への進学とは言い難い。

マスター・プランは、60年代以降、さらに増加する学生数への対策案として、他州の手本とされることになった。しかし、様々な点において、批判的な意見も見られる。権瞳は以下のように批判している。

カーはもとよりプラン作成者たちが『大衆化』する学生像の検討や、[中略] 学生を取り巻く社会問題や人種問題など、身近な社会の課題に十分に目を向けていたとはとうてい言い難い。

「大衆化」する高等教育、急増する「大衆的」な学生への、緊急の措置としての対策であったマスター・プランであるが、作成者の社会問題への関心が薄かった点を批判している。そして、後の学生運動も、マスター・プランによる有色人種学生の減少が要因の一つであるとしている。

具体的な数値や記録は残されていないものの、実際に有色人種の学生は減少していた。SFSCのある事務員は、SATを導入して以降、有色人種の学生が減少していると言及しているとして、以下のように言及している。

(下位高校出身者は)それぞれの高校でよくやったとしても、SATによって不合格となるケースがあり、[中略] 非常に形式的に下位高校出身者を締め出している⁵⁶。

また、SAT導入以降の学内の様子について、副学長のガリティも以下のように述べている。

実際、1966年にはそれまで、10、15、20%はいた黒人学生は4～5%に減っていた。[中略] SFSCは多くの人々に開かれた大学であったが、1965年から66年にはだれにも入れない場所となっていた。[中略] ゲッターの若者はSFSCに入学するチャンスはなかった⁵⁷。

これらの証言から、数値的ではないものの、マスター・プラン導入後の1960年代のSFSCにおいて有色人種学生の割合が下がったと考えられる。

有色人種の人びとが、高等教育への進学が制限されつつある中、学生た

ちはカリフォルニア州の教育システム、州教育委員会、大学に対する不満を持った。そして、それは学生運動の要因の一つとして考えられる。オーリックは、マスター・プランの被害を被ったのが有色人種の学生であり、黒人学生による抗議活動や学生運動の扇動活動もこれが原因の一つであるとしている⁵⁸。また、権も同様に「高等教育が『義務』となりつつある中で、教育こそが抑圧からの解放の手段となる」と考えていた有色人種を「大衆的な学生像」から除外したカリフォルニア州教育委員会の誤りの結果、「長期に及ぶ苦戦を強いられることになった」としている⁵⁹。

有色人種の学生の割合が減少したことを明らかにする数値的な記録は残っていないが、1960年代後半のSFSCにおける、白人学生の割合の高さは明らかであった。1967から68年のSFSCの人種別学生割合を見てみると、白人が83.9%を占めており、黒人、ヒスパニック、アジア系、アメリカ先住民、フィリピン系を合わせても14.3%である⁶⁰。SFSCの学生運動指導者は、サンフランシスコの有色人種人口の割合が上昇しているのに対し、SFSCの学生割合が、白人と有色人種では、歴然な差が出ていることを懸念していた⁶¹。しかし、人種間の人口、学生割合の差に対する懸念は、有色人種の学生だけではなく、カリフォルニア評議会も危惧しており、たびたび人種が議題に上がっていたという⁶²。それにもかかわらず、当時の社会問題、人種問題に対する関心が薄かった州教育委員会は、マスター・プランを継続し、学生運動時には、TWLFや運動参加者と激しく対立することとなった。

1960年代までのSFSCは、人種に関する大きな問題は特になく、平和的な学内環境が整っていたという⁶³。SFSCは、1960年代頃から大きな変化を遂げ、結果的にサンフランシスコの特徴と同じように、多様な人種であふれた大学となった。有色人種の学生が中心となって起こした学生運動は、必然的に増加した有色人種の人びとの不満の表れであった。その結果、エスニック・スタディーズ学部が創設され、SFSCが現在のような人種の多様性が特色となったと考えられる。つまり、学生運動はSFSCにおける人種的多様化の始まりであったと考えられる。

第三章 学生運動と「コミュニティ」

2008年10月、サンフランシスコ州立大学(San Francisco State University)では、1968年11月から69年3月に行われた学生運動の40周年を記念して、「エスニック・スタディーズ創設40年—人種的抵抗と関連—(Ethnic Studies 40 Years Later: Race Resistance and Relevance)」というテーマで、講演会や文化行事が開催された⁶⁴。アメリカで最も長期間に及んだ学生運動の結果、SFSCは国内の他の大学に先立ってエスニック・スタディーズの独立した公式プログラムを発足させた。

1960年代、アメリカ国内では多くの学生運動が勃発した。それらは、国内外の社会運動の影響が強くみられ、学生たちもベトナム反戦や人種差別の撲滅を訴えた。また、白人中産階級出身の学生が運動の中心的な存在であったことも、1960年代アメリカの学生運動の特徴である。

SFSCでも1968年から学生運動が行われたが、アメリカの典型的な学生運動とは異なっていた。学生運動を率いたのは中産階級出身の白人ではなく、有色人種の学生であった。また、学生運動の目的も独特で、有色人種のための教育の改善であった。このように、SFSCにおける学生運動は独自性が伴っている。

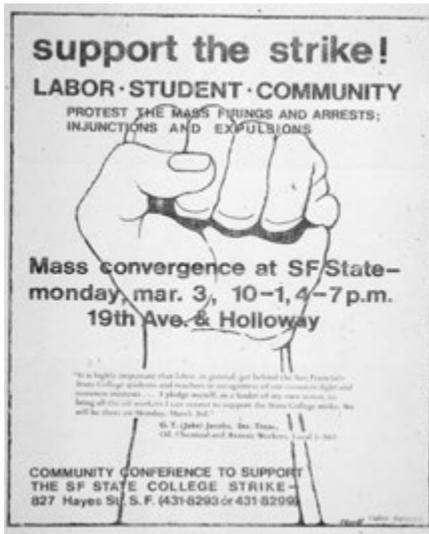
SFSCにおける学生運動の勃発の要因として、人種、時代背景、教育システムが挙げられている。そして、それらが相互的に影響しあった結果、学生運動が勃発したとされている⁶⁵。しかし、SFSCにおける学生運動を分析すると、キャンパスだけにとどまらず、サンフランシスコ、さらにはベイエリアを巻き込んだ運動へと拡大していることがわかる。そして、SFSCで始まった学生運動は、長期化するとともに、周囲を巻き込み、連日アメリカメディアを賑わせていた⁶⁶。これに注目すると、SFSCにおける学生運動は、学生だけの運動ではなかったと考えられる。そして、有色人種の学生が、学生運動の中心的な存在であったことから、サンフランシスコに散在する有色人種の「コミュニティ」にも注目するべきである。本章では、

直接的な研究対象とはされてこなかった、SFSCにおける学生運動を、サンフランシスコの有色人種コミュニティと関連付けて考察する。また、有色人種の学生が「コミュニティ」をどのようにとらえていたのかを分析することで、学生、若者から見た、学生運動期の有色人種コミュニティの実態を明らかにする。

第一節 「コミュニティ」を巻き込んだ学生運動

SFSCにおける学生運動は、学生だけにとどまらず「コミュニティ」や社会運動組織など、外部も巻き込んだ運動であった⁶⁷。しかし、学生に協力した、すべての人びと、外部組織が自発的に学生運動に参加してはいない。そこには、学生運動の必要性を訴える有色人種の学生による、学生運動への参加の呼びかけ活動があった⁶⁸。まずは、学生が呼びかけを行った理由を考察する。

資料① support the strike !



出典) “support the strike!” The SF State College Strike Collection,
 [https://diva.sfsu.edu/collections/strike/bundles/210941]
 [アクセス 2017 年 12 月 7 日]。

ダリル・ジョージ・マエダは、学生が「コミュニティ」を巻き込んだ例として、アジア系アメリカ人を挙げている。マエダは、アジア系アメリカ人学生が「モデル・マイノリティ (Model Minority)」としての意識を持つ「コミュニティ」の人びとに対し、不安を抱いていたことを明らかにしている。そして、アジア系アメリカ人の学生は、「コミュニティ」の人びとに「意識の改革」を主張し、運動への参加を呼びかけたとしている⁶⁹。

学生運動が行われる以前から、アフリカ系、ヒスパニック、アジア系の学生は、独自の学生組織を結成していた。それらの学生組織は、独自の活動に加え、コミュニティとの共同プログラムも行って⁷⁰。特に、有色人種の学生組織に共通してみられる活動は、教育に係る活動である。例えば、「チュートリアル・プログラム (tutorial program)」とよばれる活動はアフリカ系、アジア系、メキシコ系の組織で行われていた。このプログラムとは、ボランティア学生による、子どもや移民向けの勉強会である。アジア系アメリカ人学生も積極的にこの教育活動を行っていた。しかし、アジア系アメリカ人が教育活動を行った背景には、「コミュニティ」の教育の改善、そして、「モデル・マイノリティ」としての意識を払拭させる目的があったとして、マエダは以下のように述べている。

アジア系アメリカ人のストライキ参加者が、運動を通して伝えたかったことは、アジア系アメリカが、他の有色人種と同様にシステムテックに搾取され、抑圧されている、という現実である。[中略] アジア系アメリカ人は「モデル・マイノリティ」として、大胆な反抗をせずに教育、労働、家族観において人種差別に打ち勝ったとされていた。しかし、アジア系アメリカ人政治結社 (Asian American Political Alliance、以下 AAPA) は、黄色人種（「モデル・マイノリティ」とされた、他の人種とは異なる色）であることを理由に、未だに搾取されていると非難した。[中略] SFSC のアジア系アメリカ人は、「モデル・マイノリティ」ではなく、多人種の連帯 (Racial Solidarity) を共有する、同士であることを証明した⁷¹。

第二次世界大戦後の社会において、社会的な地位上昇を望んでいたアジ

ア系アメリカ人は、白人主流社会で労働や勉学に励み、「モデル・マイノリティ」と称された。これを、社会的な名誉、勤労の証、としてとらえるアジア系アメリカ人は存在していた⁷²。しかし、アジア系アメリカ人学生は、社会生活上の不利益を主張し、「モデル・マイノリティ」のイメージは、現実とは異なっていると主張した⁷³。

アジア系アメリカ人に関わらず、社会的な不利益を感じていた有色人種の学生は多かった。そのような学生は、それぞれの「コミュニティ」のおかれた状況を分析し、それを主張することで学生運動への参加を呼びかけた。アジア系アメリカ人学生による「コミュニティ」への学生運動への参加呼びかけは、学生が「コミュニティ」を巻き込んだ例である。

アジア系アメリカ人学生は「コミュニティ」を学生運動に巻き込むために動いたが、その一方で、自発的に学生運動を支援した「コミュニティ」や運動組織も見られた。そして、それら外部組織が持つ、社会運動などを通して身に付けた経験や技術は、SFSCの学生たちに強力な影響を与えた⁷⁴。ウィリアム・H・オーリック (William H Orrick) は、TWLFが「コミュニティ」や運動組織と関係を構築したことで、豊富な社会運動の経験を共有することができたとして、以下のように述べている。

TWLFは、近隣に存在する、様々なコミュニティや組織と関わりがあった。そのため、これらの活動家は、学生もより豊富な経験をSFSCにもたらした。そして、彼らは戦略をより洗練させてキャンパスに持ち込んだ⁷⁵。

学生運動に関わった「コミュニティ」や運動組織の多くは、学生運動以前から、公民権運動などの活動を行っており⁷⁶、その中には労働組織も見られる。例えば、学生運動以前から活動をしていた、ブラック・パンサー党、SDS、SNCC、SFSC教職員の労働環境の改善を求めていた教職員組合 (American Federation of Teachers) SFSC支部、都市の再開発による黒人居住地の排斥に反対していた西部付加コミュニティ組織 (Western Addition Community Organization、以下WACO)⁷⁷、などの組織がTWLFとの関係を持っていた。これらの組織は、様々な形で学生運動に影響を与え

た。中でも直接的な影響を与えたのは、ブラック・パンサー党であり、TWLF を構成する学生組織の一つである BSU は、その影響を強く受けていた。SFSC の大学院生ジョージ・メイソン・マレーのスピーチからは、ブラック・パンサー党の掲げるブラック・パワーに影響された、過激な思想がみられる⁷⁸。オーリックは、黒人の社会運動指導者と、学生との相互関係について、以下のように述べている。

学外の黒人コミュニティの指導者は、（学生運動に参加している）学生が、親世代と同じ（意識を持つ）黒人学生と差別化するために、指導者たちの経験から何を学ぶのかを注視していた。[中略]そして若者たちは、社会運動が何を生み出すのかを、指導者たちの経験から注意深く見ていた⁷⁹。

学生を支援した黒人の運動家は、学生が既存の考え方を破り、新たなものを生み出すことを望んでいた。そして学生は、社会運動が何を生み出すのかを、先人たちの経験から見ていた。オーリックは、社会運動の経験の共有が、運動家と学生の間で行われていたとしており、学生運動は学生だけではなく、外部の組織の運動でもあることを明らかにしている。そして、BSU の学生は、社会運動の経験や技術、知恵を受け継ぎ、TWLF として、さらに幅広くサンフランシスコの「コミュニティ」に対し、運動への参加を呼びかけている。つまり、SFSC における学生運動は、1950 年代から 60 年代に最盛期をむかえた社会運動の一部としても考えられる。

SFSC の学生運動は、学生だけの運動ではなく、地域の組織やコミュニティも巻き込んで行われた。アジア系アメリカ人のように、学生が率先して「コミュニティ」を巻き込んだ例もある。一方で、黒人の社会運動指導者のように、彼らの経験から生まれた知恵や技術を共有するために、積極的に学生運動に介入した例も見られる。これらのことから、SFSC における学生運動は、学生だけではなく、「コミュニティ」や運動組織といった外部組織も関わっていることが明らかである。

第二節 学生から見た「コミュニティ」

SFSCにおける学生運動の功績の一つは、エスニック・スタディーズの創設である。これは、有色人種のための学問の創設を望んでいた TWLF の目的が達成されたととらえられる。しかし、本質的に望んでいたことは、学問を通じた有色人種の人びとの社会的な地位上昇であった。そのため、エスニック・スタディーズの創設は、本質的な目標の達成のための段階の一つである。

TWLF は、学生運動を通して、大学や評議会に様々な要求をした。エスニック・スタディーズの創設もその一つであるが、学内で減少していた有色人種の「特別入学枠」の設置など、有色人種としての視点からの学内環境の改善に関する要求も含まれていた⁸⁰。そして、それらの中には、「コミュニティ」に関連する要求も含まれていた。

TWLFを構成する、各有色人種の学生組織による学生運動の指針表明には、「コミュニティ」に関連する文章、または、要求が記載されている。それらを分析することで、TWLFを構成する各組織の、それぞれの「コミュニティ」が抱えていた問題が明らかとなる。ここでは、有色人種の学生組織による要求から、「コミュニティ」に関連するものに焦点を当てる。そして、当時の有色人種コミュニティの状況と課題を明らかにし、有色人種の学生たちが、それらをどのようにとらえ、解決しようとしていたのかも考察する。

アジア系アメリカ人学生は「コミュニティ」の改善を目指していた。中でも、中国系の学生たちは、学生運動を通して「コミュニティ」の衛生、労働環境の改善と偏見の解消、そして、被差別者という「意識」を持つことを望んでいた。そのために、中国人学生連合 (Inter-collegiate Chinese for Social Action、以下 ICSA) は、本拠地チャイナタウンで、学生運動への参加を呼びかけた。ICSA の活動からは、中国系ギャングの存在により、警察から注視されていたチャイナタウンの人びとによる、白人社会に対する反抗心が表れている。

ICSA による、公式声明文『中国人学生連盟－公式声明文－1968年12

月 26 日 (Intercollege Chinese For Social Action - Official Statement - December 26, 1968)』には、チャイナタウンの劣悪な衛生環境、労働環境、社会保障の欠如が訴えられている。そして、その改善のための「意識の変革」の必要性が主張されている⁸¹。まず、公式声明文では、チャイナタウンの衛生環境について以下のように記されている。

サンフランシスコに約 80,000 人の中国人が住んでおり、その大多数はチャイナタウンに住んでいる。[中略]しかし、肺結核が流行し、賃貸料金も徐々に高くなっており、公衆衛生は十分に行き届いていない⁸²。

このように、衛生面の悪化が進み、居住環境の改善が進まないチャイナタウンには、社会福祉が不足していることを主張している。また、ICSA は中国系移民への雇用体制についても指摘しており、

チャイナタウンでは失業者が増えていて、白人雇用主は搾取し続けている。[中略]チャイナタウンでは時給 75 セントで毎日 10 時間から 13 時間働かされていることが当たり前になっている。

として白人主体の雇用形態と労働環境の劣悪さについても強く批判している⁸³。

社会的な不利益を被っていることを訴えた ICSA は、チャイナタウンの人びとに対し、「モデル・マイノリティ」としての意識を捨てるべきであるとしている。そして、中国系が「モデル・マイノリティ」と認識されてしまう要因については、「伝統的で『自民族中心主義 (ethnocentrism)』な我慢強さ、勤労、非反抗的な姿勢」が、「コミュニティ」にあるからだとしている。中国人の伝統的な民族性は「中国人神話 (Chinese myth)」と呼ばれ、「モデル・マイノリティ」の一部としてとらえられていた⁸⁴。しかし ICSA は、

黙り続けていては白人 (white pigs) 社会で中国人は搾取され続け、チャイナタウンの問題は永遠に解決されない。[中略]アメリカの政治、社会、経済を現実に見直すべきである。

と声明文を締めくくっている⁸⁵。このように、ICSA はチャイナタウンの状

態を非常に厳しくとらえており、白人中心の社会で平等に生きていくため、「コミュニティ」の人びとに「意識の改革」を求め、学生運動への参加を主張した。

ICSAが「コミュニティ」に運動参加を呼び掛けたように、TWLFも有色人種の人びとに運動への参加を呼びかけた。しかし、TWLFの呼びかけを分析すると、政治に対する考え方が強く表れていることが明らかになる。TWLFによる声明文『ブラザーズ・アンド・シスターズ (Brothers and Sisters I)』は、元カリフォルニア州知事のロナルド・レーガン (Ronald Reagan)、元サンフランシスコ市長ジョセフ・アリオート (Joseph Alioto) など、白人政治家を徹底的に批判している。TWLFは、選挙によって選出された「彼らの (政治) 生命は我々の手の中にある」として、学生運動を通じ、政治家の力を弱めることを主張している⁸⁶。また、運動期間を引き伸ばし、学生運動をキャンパスから「コミュニティ」、さらにはサンフランシスコ市全体へと拡大させためには、「コミュニティ」からの協力が必要であるとして、以下のように述べている。

我々はこのストライキを引き延ばさなければならない。そうすればレーガンは壁にぶち当たり、豚は旋回することになるのは言うまでもない。我々は運動を引き延ばすため、「コミュニティ」と労働者からの支援を保持し続けなければならない。なぜなら、それは豚を豚小屋に閉じ込める手段であるからだ。[中略] 豚のキャンパスへの侵入を防ぎ、運動をキャンパスから街全体に広める。そのためにはコミュニティの支援は必要不可欠である。[中略] 我々はこのストライキをキャンパスから「コミュニティ」にまで広げた。我々が次に目指すのは、「コミュニティ」から市 (サンフランシスコ) 規模の運動である⁸⁷。

TWLFは、学生運動の期間を引き伸ばし、サンフランシスコ市全体で行うことで、学生の要求を無視し続けるレーガン州知事の力を弱めようと考えていた。また、アリオート市長に対しても、選挙で選出されているのであれば「レーガンではなく、我々 (有権者) の声にまず耳を傾けるべきである」と主張している⁸⁸。TWLFによる「コミュニティ」への呼びかけから

は、ICSAの声明文には表れていない、政治色が表れていた。特に、白人に対する反抗心が強く現れており、社会と政治の変革のために、「コミュニティ」からの協力を望んでいた。

ICSAによる「コミュニティ」の環境の改善と「意識の改革」、TWLFのような政治色の強い呼びかけの一方、日系アメリカ人の学生組織であるAAPAは、有色人種に関する学問の創設に関連付けて、日系アメリカ人の学問と歴史を重視していた⁸⁹。そして、その背景には、第二次世界大戦中に「敵国人」とされた、日系人特有の歴史がある。

AAPAはエスニック・スタディーズの一部であるジャパニーズ・アメリカン・ヒストリーについて、方針説明書の中で以下のように述べている。

（ジャパニーズ・アメリカン・ヒストリーは、）日系アメリカ人と学生に対し、アメリカの発展の歴史の中の「日系人」の役割を学ぶ機会を提供する。[中略]教育の目的は、無視されてきたことを拭い去り、我々が生活している環境における個人として、集団としてのアイデンティティの構築と認知である。現在、ジャパニーズ・アメリカン・スタディーズは大きな関心を持たれていない。しかし、将来的には学生がエスニック・スタディーズで学士号、修士号が取れることを望んでいる。我々がこの目標を達成するために必要なことは大学とコミュニティからの支援である⁹⁰。

この「方針説明書」からは、日系人学生が、アメリカの歴史の中の「日本人」を学ぶ機会を望んでいたことがわかる。これは、第二次世界大戦中に大統領令第9065号により、「敵国人」として強制収容施設に送還された歴史が関連していると考えられる。そして、実際にAAPAのメンバーの中には、第二次世界大戦中の強制収容、そして、都市における日系人について研究している者もいたという⁹¹。歴史や学問の重要性を説き、コミュニティへの運動参加を促している組織はほかにも存在するが⁹²、日系人の場合は、独自の歴史を学び、日系人の「アイデンティティ」を明らかにする、という点において、他の有色人種とは異なる運動への目的がある。これは、日系人の独特なもので、日系人学生によるコミュニティへの訴えは、TWLF

に属していながらも、独自の問題と向き合い、その解決と創造を望んでいた学生がいたことを示している。

日系人と同様に、フィリピン系学生も歴史を学ぶことを重視していた。しかし、フィリピン系の場合は、アメリカにおけるフィリピン系アメリカ人の歴史よりも、フィリピンの全体的な歴史に焦点が置かれていた⁹³。フィリピンの歴史的な起源は、インドネシア・ジャワ島近辺で1500年頃に滅んだマジャパヒト王国以降である⁹⁴。そして、20世紀に「第三世界」の一つとして独立するまでをフィリピンの歴史としてとらえており、アメリカにおける日本人の歴史に焦点をおく日系人の歴史観とは異なる。

フィリピン系・スタディーズで取り扱ったのは、フィリピンにおける政治、自然、歴史である⁹⁵。そして、歴史分野は「スペイン植民地下のフィリピン史」と「現代フィリピンとフィリピン系アメリカ人コミュニティの社会問題」の二つに分けられていた。特に後者は、フィリピン系コミュニティの抱える問題に焦点を当てているため、他の有色人種学生と同様に、「コミュニティ」の現状に焦点が置かれていたことがわかる。しかし、フィリピン系学生の主張からは、当時のフィリピン系コミュニティが抱えていた課題など、具体的なことは記されていない。また、フィリピンの全体的な歴史に焦点がおかれていたことから、「コミュニティ」に目を向けつつも、それまで注目されてこなかった、フィリピン全体を視野に入れていたのかもしれない。

フィリピン系学生は、独自の歴史を学ぶことを目的として、新たな学問（フィリピン系・スタディーズ）の創設を望んでいたことがわかる。それは、日系アメリカ人とは異なる観点からの歴史の追求であった。しかし、フィリピンの歴史が、それまで注目されてこなかったと想定すれば、日系人による、独自の歴史、アイデンティティの追求をするという背景と共通している。関心が向けられていなかった有色人種の歴史を、学ぶために専門の学問を創設することは、人種的アイデンティティの構築、もしくは、それを再確認するという目的があったのかもしれない。

ここでは、中国系、TWLF、日系、フィリピン系を例に、学生運動の目的

と、それぞれの「コミュニティ」への運動参加の呼びかけについてみてきた。基本的に、白人中心の社会や政治、教育に対する変革を求めた TWLF の姿勢は、各有色人種で共通していた。そして、各有色人種が、それぞれの「コミュニティ」における社会的な問題を抱えていたことも明らかとなった。有色人種の学生は、これらの問題に対し、問題意識や危機感を持っていたと考えられる。そして、その「意識」を共有し、問題を解決するために「コミュニティ」に様々なことを訴え、参加を呼びかけた。

第四章 サミュエル・イチエ・ハヤカワと日系人コミュニティ

TWLF は、学生運動を通し、様々な社会的な変革や要求を主張した。それらを見ることで、有色人種の学生の中に共通する考えがみられる。その例が、BSU と TWLF による「15 箇条の要求」である。そして、それらの要求の一つである有色人種の学生の増加促進は、「コミュニティ」の教育水準を高めるためにも必須であり、加えて、学内の人種の平等性、サンフランシスコの地域的特性を反映させるうえで、重要な意味を持つ要求であった。これ以外にも、エスニック・スタディーズ学部の創設、有色人種の教職員の雇用など、教育的なこと以外にも有色人種の学生に共通する考えがいくつか見られる。

有色人種の学生の中で、共通の考えが見られる一方、意見の相違が露呈する場面もあった。1968 年 11 月 26 日、日系アメリカ人 2 世の言語学教授、サミュエル・イチエ・ハヤカワが、SFSC 学長代行に就任した。学生運動を徹底的に弾圧したハヤカワは、学生運動の象徴的な人物となった。それは、日系人学生、日系人コミュニティにとっても同じであった。

資料② Wanted Sam I. Hayakawa



出典) “Wanted Sam I. Hayakawa,”
 出典: San Francisco Bay Area Television
 Archive
 [https://diva.sfsu.edu/collections/
 sfbatv/bundles/201518]
 [アクセス 2017 年 12 月 27 日]。

一部の日系人がハヤカワを非難する一方、日系人コミュニティの多くは、学生運動が開始された当初、ハヤカワを支持していた⁹⁶。日系人コミュニティの、ハヤカワをめぐる対立は、「コミュニティ」に亀裂を作り、他の有色人種からの不信を育む結果となった。反ハヤカワ派は、これを阻止するため、日系人コミュニティに対し、ハヤカワを「コミュニティ」の代表者にすべきではないと訴え続け、「コミュニティ」の分裂を防いだ。その結果、日系人コミュニティのハヤカワへの支持は低下した。

ここでは、ハヤカワの学長代行就任前後からの学生運動を通し、ハヤカワをめぐる日系人コミュニティ内の対立について分析する。これにより、なぜ日系人コミュニティ内でハヤカワをめぐる賛否の対立が生まれたのかを明らかにする。また、ハヤカワと学生運動に対する、日系人の考え方と「モデル・マイノリティ」としての意見を考察する。

第一節 ハヤカワと学生運動

ハヤカワは、共和党からカリフォルニア州選出の上議院議員（1976-1983）を務めた経歴もある、右派の知識人だった。また、学長代行を務める以前から、学生運動に対し批判的な発言をしており、これに対し、当時のロナルド・レーガン州知事やカリフォルニア州立大学評議委員会委員長を務め

ていた Glenn・ダムケ (Glenn Dumke) は評価していた⁹⁷。そして、ハヤカワは、学生運動への対処を任される形で学長代行に選出された。

ハヤカワが学長代行に就任した 1968 年 11 月は、TWLF が本格的な学生運動に突入してから時間は経っておらず、学生と警察、特殊戦術部隊との間で緊張が高まった時期であった。しかし、この緊張状態は、ハヤカワの学長代行就任による影響ではなく、前学長ロバート・スミス (Robert Smith) の頃から続いていたものであった⁹⁸。

スミスは、TWLF と評議会の板挟み状態にあり、学生運動の対応を平和的に行おうと試みていた。しかし、実際は困難を極めていた。過激な発言により学内での非常勤講師を解雇された、BSU 議長で大学院生ジョージ・メイソン・マレーの雇用をめぐり、スミスは評議会と対立していた。TWLF からは、マレーを再雇用するように要求があったが、評議会はこれを拒否し続けていた⁹⁹。スミスは、対立する TWLF と評議会の話し合いの場を設ける目的で、1968 年 10 月に集会 (Convocation) を開いた¹⁰⁰。

資料③ SF State Campus & Convocation Scene



出典) “SF State Campus & Convocation Scene” (出典: San Francisco Bay Area Television Archive [https://diva.sfsu.edu/collections/sfbatv/bundles/201518] [アクセス 2017 年 10 月 7 日])。

集会には、TWLF と評議会の委員に加え、SFSC の学生も多く参加した。

しかし、TWLFと評議会は互いに主張を譲らず、関係は改善されなかった。「スト進行中！大学を閉鎖しろ！（On strike! Shut it down!）」と叫びながら学内で行進を続ける約2,000人の運動参加者と、配備されていた警察との間で緊張が高まると、その日は午後から大学は閉鎖された¹⁰¹。スミスは、90日の大学閉鎖を提案して学内の緊張状態に收拾をつけようとした。しかし、TWLFがこれに賛同する一方、評議会は強く批判し、スミスは集会後の大学閉鎖の責任をとるかたちで辞任を発表した¹⁰²。そして、その4週間後にハヤカワの学長代行就任が発表された。つまり、スミスが学長を務めていた時から、学内が緊張状態であったことは明らかである。そして、この緊張状態は、ハヤカワの学長代行就任により高まり、全米の注目を集める衝突事件までが発生する。

ハヤカワが学長代行に選出されたのは、「無意味なことを許さない (no-nonsense)」姿勢と、学生の武装化に対する強硬路線が、レーガン州知事と評議会に評価されたからであった¹⁰³。ハヤカワは、「法と秩序 (law & order)」を基盤に学校運営を行うため、就任後に様々な制限を設置した。しかし、そのような強硬路線は、学生運動をさらに激しくさせた。

ハヤカワが学長代行に就任した11月は、学生運動による緊張状態の高まりから、授業参加率が約50%減少した¹⁰⁴。これに対しハヤカワは、収穫感謝祭休暇後の12月に「非常事態宣言」を発し、いくつかの規制を設けたが、それらのほとんどは、学生運動の抑制を目的としていた¹⁰⁵。例えば、学内でのピケの禁止、非公式な集会や、集会における音響機器の使用禁止などである。これらは、TWLFや運動支持者による学生集会を間接的に禁止する規則であった。ハヤカワは、これらの規制に加え、学生運動中は学内に警察官を常駐させることを発表した¹⁰⁶。これは、学内の「平和維持」が目的とされたが、学生からだけでなく、教職員からも批判があがった¹⁰⁷。学内に警察官を常駐させることに対し、反対の声が高まった。しかし、ハヤカワは、これはSFSC内の「静かな多数者 (silent majority)」の意見を反映した結果であるとしている¹⁰⁸。そして、学内の人種的平等、学内の非暴力、大学の正常な再開、をもとめる人びとに対し、(大学から

配布される)「青い腕章」を身につけるように呼びかけた¹⁰⁹。実際に、この腕章を身につけた学生や教職員がいたと見られ、後に学生運動支持者との間で衝突事件を起こしている。このように、ハヤカワは、信条である「法と秩序」のため、急進的な学校運営と規制を進めた。そして、「静かなる多数派」という味方を得るための政策も施し、TWLFに対抗し、学生運動を弾圧した。

TWLFは、学内に「コミュニティ」の存在を取り入れることでハヤカワに対抗しようと考へ、学生運動への参加を呼びかけた¹¹⁰。この呼びかけにより、学生運動は地域に根ざした運動となり、運動支持者は増加し、運動の拡充につながった¹¹¹。ハヤカワによる様々な規制が出された後も、TWLFと運動支持者は学内外で行進を行ったが、参加者の増加と多様化を表すように、各有色人種コミュニティの人びと、牧師、下院議員、新聞記者、写真家など、さまざまな人が行進に参加するようになった¹¹²。また、北カリフォルニア公共メディアのKQEDによる報道は、反戦運動家など、学生以外の人びとの姿が運動にみられることを伝えている¹¹³。TWLFによるコミュニティへの呼びかけは、運動参加者の増加と多様化をうながし、学生運動の拡がりにつながった。

TWLFと体制側の対立は、運動を長期化させたが、これにより運動支持者の連帯を強化させた。そして、ハヤカワによる学生運動を非難する頑なな姿勢は、より明確になった。ハヤカワは、TWLFが主張する大学閉鎖を認めず、学生運動を徹底的に弾圧する姿勢を貫いた。その姿勢は報道により広まり、SFSCは注目を集めることとなる。

ハヤカワは、12月2日に学生集会の場に現れ、「ひと暴れ」している。これは「サウンドトラック事件(Sound Truck Incident)」と呼ばれ、学生運動を象徴する事件とされている¹¹⁴。この日は、集会が大学正門前の19番通りとホロウェイ通の交差点で行われたが、ハヤカワが禁止した拡声器を用いて学生は演説を行っていた。それを学長室から見ていたハヤカワは、突然集会に現れ、密かにスピーカーが搭載されたトラックの荷台上り、怒りのままに放送機器とそれらを繋ぐ配線を引きちぎった。取り押

さえようとする学生に対し、ハヤカワは「私を突つくな」と叫びながら、学生を振り払ったが、すぐに引きずり下ろされた。結局、ハヤカワは「ひと暴れ」して学長室に引き上げ。この場面は、学生集会の取材に来ていたKQEDのカメラに取められ、その日のうちに放送された。ハヤカワの「理性を失った」行動は全国に映し出され、学生運動はさらに注目を浴びることとなった。

資料④ Confrontations & Hayakawa on the sound truck



出典) “Confrontations & Hayakawa on the sound truck” (出典: San Francisco Bay Area Television Archive
[<https://diva.sfsu.edu/collections/strike/bundles/187201>]
[アクセス 2017 年 12 月 29 日])

TWLF や運動支持者は、学内で集会や行進を行っていたが、青い腕章を身に着けた人びととの間で、衝突事件も起きている。特に激しい衝突事件となったのは、「サウンドトラック事件」の翌日である、1968 年 12 月 3 日に起こった¹¹⁵。「血の火曜日 (Bloody Tuesday)」と呼ばれたこの日は、行進者が約 2,500 人集まっていた。一部の行進者が、青い腕章を身につけた学生と口論になり、衝突すると、それが一気に広まった。学内に常駐していた警察、特殊戦術部隊は、騒乱状態を解消するため、行進者を警棒で叩いて分散させようと試みた。しかし、一部の参加者は警察とも衝突し、結果的に警察、特殊戦術部隊による、無差別の暴力事件へと発展した¹¹⁶。その場にいた報道関係者は、その様子を写真におさめており、翌日の新聞に掲載された。この結果、「血の火曜日」の様子はアメリカ中に広まり、SFSC における学生運動はさらに注目を集めることとなった¹¹⁷。また、こ

の報道は「コミュニティ」の人びとにも強く影響した。人びとは、有色人種の学生による学生運動に対する関心を強め、結果的に運動支持者は増加し、強い関心は運動支持者間の、連帯力の強化につながった。この連帯力は学生運動が長期化し、激化するとともに強くなった。

学生運動に対し、否定的な姿勢を崩さず、学生運動への弾圧的な政策を繰り返していたハヤカワであったが、実際は学内外からの批判などによってプレッシャーを感じていた。特に、「コミュニティ」の存在に危惧していたことを、後のインタビューで明らかにしている¹¹⁸。ハヤカワは、学生よりも SDS やブラック・パンサー党といった全国規模の組織、「コミュニティ」による学生への扇動を思慮していた¹¹⁹。ハヤカワは、学生運動への対処として、警察の常駐、学内活動の取り締まり規則を施し、「サウンドトラック事件」を通して学生運動に対する厳しい姿勢を見せつけたが、それらは、学生運動が長期化し、学生が柔軟な姿勢にならないことへの焦りだったとエドワード・ディアナンド・アスレガドー (Edward Dyanand Asregadoo) は主張している¹²⁰。アスレガドーによると、ハヤカワは、「コミュニティ」や組織が、学生運動の主犯格であると考えていた。そして、「静かなる多数者」に対し、青い腕章を身に付けるように呼びかけたことも、焦りの表れであったとしている。ハヤカワによる学生運動への否定的な姿勢は、運動終結を早めるための一つの手段であった。しかし、「コミュニティ」や組織による、運動への参加は、運動自体の長期化をうながし、運動支持者は連帯をより強めることとなった。ハヤカワは「法と秩序」の基づき、学生運動に対する否定的な姿勢を貫いたが、その背景には、学外の人びとの存在に対する大きな不安があった。

学生が和解に向けて動いていたら、ハヤカワもそれに協力する姿勢を持っていたかもしれない。それは、学生運動の即刻の終結を、TWLF もハヤカワも望んでいたからである¹²¹。しかし、ハヤカワの学生運動への否定的な姿勢、運動参加者と警察との衝突事件など、学生運動の終結に向けた課題は、学生運動支持者、ハヤカワや評議会といった体制派のどちらも有していた。学生が妥協するとは考えにくく、和解の方向とは逆に進んでい

たことを考慮すると、アスレガドーの主張は受け入れにくい。そして、妥協を許さない姿勢は、ハヤカワも同様である。ハヤカワは、エスニック・スタディーズの創設について、「有色人種の学生が、彼らの学問の創設を願っていると言う。そうしたいのならば、彼らが大学を管理する側になればいい」と発言している¹²²。この発言は、学内外からの批判とプレッシャーを感じていた一方、学生運動に妥協を持たない姿勢を貫いていたことを示している。互いに譲歩しなかったことで、学生運動は長期化し、激化した。特に、ハヤカワの学長代行就任以降は顕著に衝突事件が起り、アメリカ国内でも注目を集める学生運動となった。結局学生運動は、1969年3月に、特別調査委員会とTWLFによる交渉の末に終結をむかえるまで、5ヶ月を費やした。

第二節 ハヤカワと日系人コミュニティの状況

ハヤカワの存在は、日系人コミュニティにおいても大きな争点となり、脅威でもあった。ハヤカワを批判していたのは、主に学生運動に参加していた日系三世など、AAPAに属する若者が多数であった。その一方、ハヤカワを支持していたのは、日系二世であった。また、コミュニティで中心的な役割を担っていた、日系アメリカ人市民協会 (Japanese American Citizens League、以下 JACL) も、ハヤカワの支持を表明していた¹²³。ハヤカワを支持する人々を世代別に考察すると、二世が主な支持者で、三世が不支持者という構図が成り立つように考えられる。しかし、ハヤカワに対する賛否の構図は「自由主義的三世」の戦いではなく、「反ハヤカワ派」と「同化モデルに縋りつくことで人種、権力のパラダイムに支配された二世」との闘いであり、世代的な対立ではない¹²⁴。

それでは、日系人コミュニティ内のハヤカワをめぐる論争は、どのような構図の下で形づくられたのか。そして、学生運動当初、JACLといった日系人コミュニティの中心的組織がハヤカワを支持する一方、反ハヤカワ派はなにを主張し、学生運動への参加を呼びかけたのか。これらを考察する

ことで、学生運動に対する日系人からの考え方、そして、日系人の社会的な立場を明らかにする。また、「モデル・マイノリティ」とされた日系人の、「当事者」としての意見を得ることができる。

まずは、日系人コミュニティ内のハヤカワをめぐる対立について見ていきたい。学生運動当初、多くの日系人がハヤカワを支持していた。二世商工会議所青年部 (Nisei Junior Chamber of Commerce) は、「反ハヤカワ派は『日系人コミュニティ中の 1/12 しかいない、マイノリティの中のマイノリティ』であり、日系人の約 85% はハヤカワを支持している」としている¹²⁵。加えて、日系人コミュニティの代表者もハヤカワを支持しており、日本町コミュニティ利益委員会 (Community Interest Committee of Nihonmachi、以下 CICN) を、1969 年 2 月 8 日に結成した。この組織は、ジョージ・ヤマサキ (George Yamasaki)、クリフォード・ウエダ (Clifford Uyeda)、スティーブ・ドイ (Steve Doi) といった、JACL の代表を経験した人々が中心となって組織されていた¹²⁶。CICN は、ハヤカワを JACL の年度会のゲストとして招待する計画を立てており、ハヤカワへの支持をコミュニティに広めることに尽力したと考えられる。特に、ドイとウエダは、ハヤカワを支持する請願書を作成している¹²⁷。これらのことから、ハヤカワは学生運動当初、日系人コミュニティから強い支持を得ていたことがわかる。

また、ハヤカワの支持者を分析すると、共通点が明らかとなる。それは、ハヤカワを支持していた人びとの多くが、二世であったという点である。CICN を結成したヤマサキ¹²⁸、ドイ¹²⁹、ウエダ¹³⁰、は日系一世の両親を持つ二世であり、二世商工会議所青年部も、その組織名が表すように、二世が中心的な組織だった¹³¹。これらのことから、ハヤカワを支持していた大半が二世であったと考えられる。そして、二世がハヤカワを指示した背景には、第二次世界大戦後に形成された、「モデル・マイノリティ (Model Minority)」が関係していたと考えられる¹³²。

ハヤカワは、「モデル・マイノリティ」の象徴な人物だった。例えば、ハヤカワの著書 *Language in Action* には、人種差別の撲滅のための言語の

使用法が述べられている¹³³。この方法は、有色人種の人びとが、独特の訛りをなくし、白人の話す英語に近づけることで、正確な意思疎通が可能となり、結果的に人種差別がなくなる、という主張であった。これはつまり、有色人種の人びとによる、白人への言語的な同化を主張しており、ハヤカワの白人至上主義的な考え方を表している。また、「モデル・マイノリティ」としてのハヤカワは、日系人コミュニティからも評価を得ている。1968年に学長代行に選出されたハヤカワは、日系アメリカ人新聞『ホクベイ・マイニチ (*Hokubei Mainichi*)』から、「1968年の人物 (“Nisei of the Year” for 1968)」に選ばれている¹³⁴。このように、白人社会への同化を主張していたハヤカワは「モデル・マイノリティ」として白人主流社会に受け取られていた。そして、学長代行に選出されたことは、その証明と考えられ、レーガン州知事も、ハヤカワの姿勢を高く評価しており、学生運動に対する様々な決断についても評価している¹³⁵。

資料⑤ Hayakawa & Reagan in Sacramento



出典) “Hayakawa & Reagan in Sacramento” (出典: San Francisco Bay Area Television Archive [<https://diva.sfsu.edu/collections/sfbatv/bundles/201518>] [アクセス 2017年12月22日])。

「モデル・マイノリティ」は、第二次世界大戦と強制収容を経験した二世の多くにとって、誇るべき考え方であり、白人中心の社会における社会的地位上昇と、豊かな生活を得る手段でもあった。そのため、日系人は、働き者で、声を発して抗議することを避ける人種として、白人の雇用主に楯突くことをしなかった¹³⁶。多くの日系人が、白人からの支持を得て大学の学長に登りつめたハヤカワに対し、誇りを感じ、支持していたことは必然的であったかもしれない。そして、たとえ学生運動を弾圧しても、ハヤ

カワの行動は正義であると感じていたと考えられる。

ハヤカワの支持層に二世が多く、反ハヤカワ派の多くが三世であったため、世代別でハヤカワへの支持が異なっていたと考えられる。しかし、実際には、二世のなかにも学生運動を当初から支援していた人物もいた。例えば、エディソン・ウノ (Edison Uno)、レイモンド・オカムラ (Raymond Okamura)、ジェームズ・ヒラバヤシ (James Hirabayashi) などの日系二世は、三世の学生と共に学生運動に参加していた代表的な人物であった¹³⁷。彼らは、AAPA の活動に協力し、日系人コミュニティ内の学生運動への参加促進を目的とし、SFSC における学生運動についての日系アメリカ人特別委員会 (Ad Hoc Japanese-American Committee Concerned with the SF State Crisis、以下特別委員会) を結成した¹³⁸。特別委員会は、TWLF の「15 箇条の要求」への賛同を發表し、「モデル・マイノリティ」を批判した。そして、日系人社会が学生運動に参加する意義を主張した¹³⁹。主張の場として討論会や演説会を開き、学生運動やハヤカワへの対処を論点として話し合いを行ったが、ハヤカワが日系人コミュニティを代表する人物ではないこと、TWLF の要求は合理的であることなどを主張する場としていた¹⁴⁰。

特別委員会による活動の結果、日系人コミュニティ内のハヤカワ支持は低下した。それは、個人単位、組織単位での反ハヤカワ表明から明らかとなる。特別委員会のように、組織的にハヤカワへの批判をおこなったのは、JACL サンフランシスコ支部婦人団体 (Woman's Auxiliary of the San Francisco JACL、以下婦人団体) であった。婦人団体は、JACL が年度会にハヤカワをゲストとして招くことに反対するなど、反ハヤカワ派の姿勢を見せていた。しかし、結局のハヤカワはゲストとして招かれ、スピーチを行っている。これに対し、二世を含め約 100 人が抗議活動を行った。「ロナルド・レーガンのパペット (a puppet of Ronald Reagan)」と記されたピケが掲げられ、抗議者は「ハヤカワをぶっつぶせ! (Down with Hayakawa!)」と叫んでいたというのが¹⁴¹、そこに婦人団体もいたと予測される。

日系人コミュニティ内でハヤカワ支持者が低下した背景には、特別委員

会やAAPAによる呼びかけ活動の他に、理由があった。中でも、他の有色人種の「コミュニティ」との関係悪化への懸念は反ハヤカワ派に共通して見られた。学生運動当時、サンフランシスコ日系人居住区（通称、日本町）は、黒人居住区に隣接していた。婦人団体は、ハヤカワを支持する事で、他の有色人種の人びとの間に不信を育むことを警戒していた¹⁴²。有色人種間関係悪化については、特別委員会のウノも憂慮していた。ウノは、「黒人コミュニティとの調和と共通理解を維持するため、我々はハヤカワ教授を非難し、（関係を）分断する必要がある」と述べている¹⁴³。婦人団体やウノが懸念していたように、ハヤカワを支持することは、他の有色人種との関係悪化を生む原因となる。そして、有色人種である一方、白人を支持するマイノリティとして、他の有色人種から「敵」とされる危険性があったことから、ハヤカワ支持者が減少したと考えられる。

AAPA、特別委員会、婦人団体は、ハヤカワを日系人コミュニティの代表者として認めないことを強く主張し、その信憑性を持たせるため、ハヤカワの経歴を用いた。そしてハヤカワは、カナダ出身であり、アメリカ西海岸で育ち、第二次世界大戦を経験した日系二世とは、異なるとした。マエダは、第二次世界大戦中に日系人であるために、強制移住を強いられ、人種差別を経験したサンフランシスコの日系人二世と、異なる経歴を有していたハヤカワは、同じ「二世」とは呼べない、としている¹⁴⁴。

ハヤカワは1906年6月18日にバンクーバーで誕生した、日系カナダ人移民の一世を両親にもつ日系カナダ人二世であった¹⁴⁵。大学卒業後、マントバ州ウィニペグのマントバ大学大学院、モンリオールのマギル大学大学院、さらにウィスコンシン大学大学院に進学し、心理学と言語学を学んだ。1935年にウィスコンシン大学大学院を卒業した後は、そのままアメリカにとどまり、ウィスコンシン大学、イリノイ工科大学、シカゴ大学で言語学者として教鞭をとった。また、シカゴ大学にいた時には、黒人ジャズに精通し、そこから作家活動やラジオのパーソナリティーも行なった。アメリカでの生活が長かったため、1955年にSFSCの言語学の教授として就任した時には、国籍上はアメリカ人となっており、SFSCを退いた後の

1976年には、共和党から上議院議員選挙に出馬して当選している。マエダが主張したように、ハヤカワは1939年から1947年にかけて、イリノイ工科大学で講師をしており、第二次世界大戦中の日系人の強制移住は経験していない。また、サンフランシスコに移住したのが1954年と第二次世界対戦後で、日系コミュニティとの接触もほぼ無かった¹⁴⁶。これらを考慮すると、ハヤカワがサンフランシスコの日系人を代表するは言い難い。

反ハヤカワ派は、討論会や新聞などでハヤカワの生涯を紹介し、日系アメリカ人の「コミュニティ」との繋がりやの薄さと、日系人コミュニティの代表者として不適格であることを主張した¹⁴⁷。第二次世界大戦を通し、日系人として差別を経験した日系二世、または三世にとって、カナダ出身で強制収容を経験していないハヤカワは「部外者」として映ったかもしれない。たとえ、「モデル・マイノリティ」の象徴的存在であったとしても、ハヤカワが日系人コミュニティを代表することにふさわしいとは言い難く、不支持を表明する人が増加したと考えられる。

ここまで、ハヤカワを支持していた二世と、批判していた日系人の主張や歴史的背景を見てきた。ハヤカワに対する賛否が分かれた背景には、第二次世界大戦が色濃く反映されていた。また、「コミュニティ」が、ハヤカワを日系人の代表者として認めることに躊躇したことからは、「モデル・マイノリティ」像をめぐる、日系社会の分裂が垣間見える。これらの理由により、日系人コミュニティ内のハヤカワ支持は低下した。

日系人コミュニティ内でハヤカワへの支持は低下したが、それが学生運動の終結に直接的に繋がったとは言い難い。実際の学生運動を終結に導いたのは、TWLFによる粘り強さがあった。1969年3月20日、学生運動の終結のために構成された特別調査委員会は、TWLFによる「15箇条の要求」を承認することを発表した。これにより、学生運動は終結をむかえ、エスニック・スタディーズが誕生した。これは、学生の「勝利」である。しかし、これは学生だけではなく、間接的ではあるが運動を支持し協力した、有色人種のコミュニティにとっての「勝利」でもある。

結論

本論文では、1960年代という時代背景、サンフランシスコの多様な人種性、有色人種の「コミュニティ」に焦点を当て、SFSCにおける学生運動を考察した。特に、有色人種の学生、または、人びとの視点から、1960年代とサンフランシスコを見ることで、当時の有色人種の人びとの、社会、政治、教育に対する不満や要求が明らかとなった。さらに、各有色人種の人びとによる要求を分析することで、それぞれのコミュニティが、独自の問題や課題を抱えていること、そして、有色人種の学生がそれに対し、どのような意見を持ち、主張をしていたのかも明らかになった。

日系人コミュニティ内の、ハヤカワ学長代行をめぐる対立を分析することで、有色人種の人びとの中にも、学生運動を支持していない人がいたことも明らかになった。特に、日系人の場合は、「モデル・マイノリティ」として、当時の白人中心社会への適応を優先した人びととそれに反対する人びとがいた。これは、日系人コミュニティに限った事例であるため、全ての有色人種コミュニティで同様の対立があったとは言い難い。しかし、SFSCにおける学生運動をめぐり、日系人以外の有色人種の人びとの中でも対立があったのか、という課題が新たに生まれた。

先行研究では、SFSCにおける学生運動の発生要因として、人種、時代背景、教育システムを挙げ、それらが相互的に作用しているとした。マエダは、サンフランシスコにおける人種的な多様性が、学生運動の発生要因の一つとしたが、サンフランシスコに多様な人種がいたから、学生運動が発生し、さらに成功に近づいたと考えられる。

本論文では、SFSCにおける学生運動と、人種や時代背景、教育システムの影響も考察したが、運動の中心には、常にサンフランシスコの「有色人種」の人びとがいた。そして、1960年代という時代背景も、マスター・プランといった教育システムも、「有色人種」の人びとに特に作用していたと考えられる。

オーリックは、公民権運動やブラック・パンサー党といった、社会運動

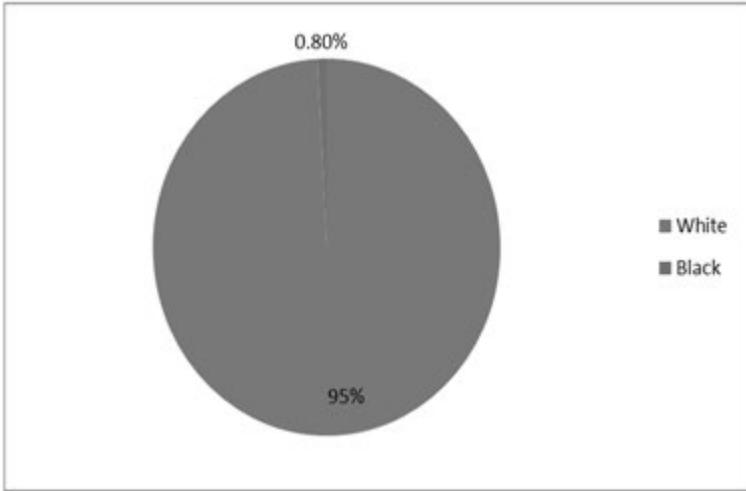
組織と TWLF の関係性について主張した。そして、TWLF は社会運動組織からの影響を受けていたことを、本論文でも明らかにしたが、中でも BSU からはブラック・パワーの影響が見られた。TWLF がブラック・パンサー党などの組織からの影響を受けたのは、黒人、もしくは、「有色人種」という共通点があったからだと考える。共に「有色人種」として、白人中心の社会の変革を望んでおり、これにより、有色人種間の関係が生まれたと考えられる。

権は、1960年代のカリフォルニア州内の高等教育に焦点をあて、マスター・プランと有色人種の学生の減少を主張した。マスター・プランの導入により有色人種の学生は減少したことは、いくつかの証言から明らかとなった。ここでも、中心には「有色人種」の人びとがいた。教育システムの影響を受けたのは「有色人種」の人びとであった。また、有色人種の学生の減少に危機感を持ち、行動したのも「有色人種」であった。ここからも、有色人種の人びとの存在が大きかったと考える。

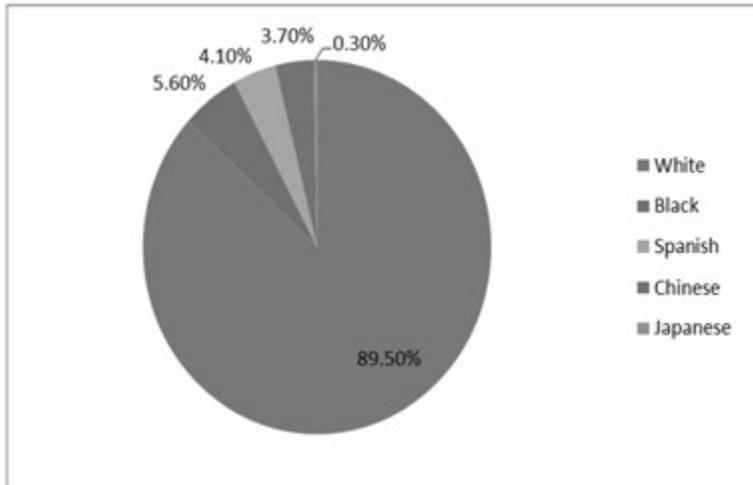
先行研究では、人種、時代背景、教育システムが相互作用の関係にあったとした。しかし、その中でも、「人種」の存在が大きかったと思われる。本論文では、「コミュニティ」を通し、有色人種から見た社会、政治、教育について考察した。実際の1968年頃の社会は、「有色人種」にとって厳しいものであったが、それら打破し、新しい社会づくりを行うために立ち上がったのは、ベビーブーム時代に生まれた「有色人種」の学生であった。このことから、SFSCにおける学生運動の発生に最も影響していたのは、人種であったと考える。

1969年、学生運動の末に創設されたエスニック・スタディーズであるが、世界的に拡大・繁栄しているわけではない。また、他学部との再編成や解体の可能性が仄めかされる状況下で、1960年代と変わらず、常に闘争の場であり続けている¹⁴⁸。人種的な対立が、アメリカをはじめ、我が国日本や世界において、改めて問題となっている近年こそ、SFSCの学生運動から学ぶべきことが、多くあると考える。

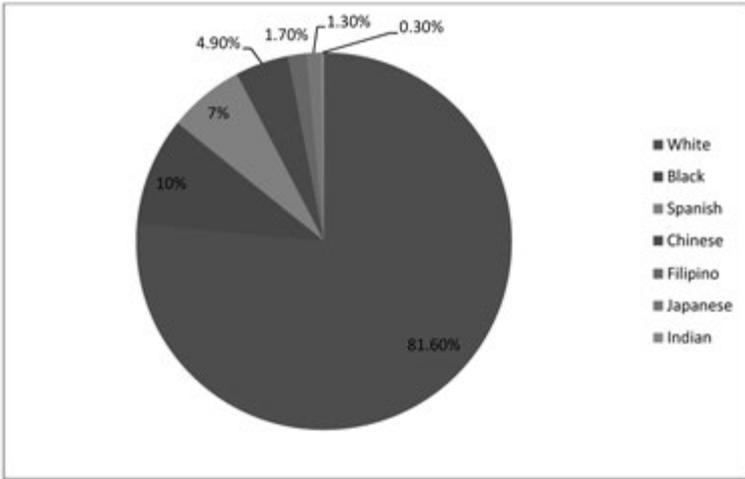
資料 I Bay Area Census/San Francisco City and County
1940



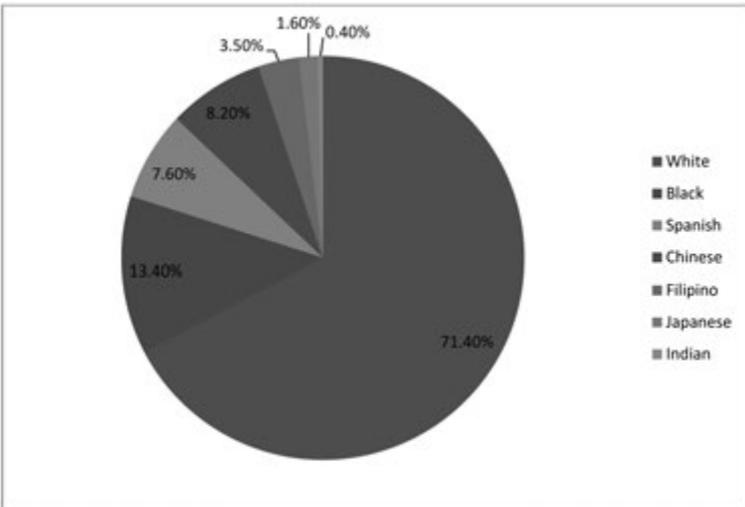
1950



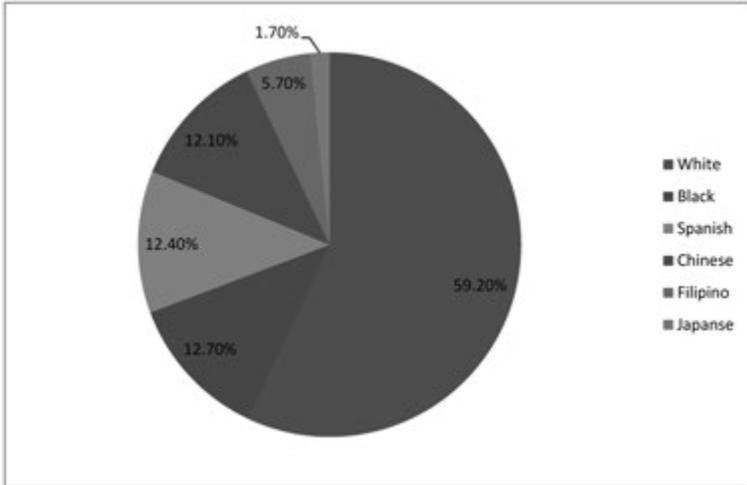
1960



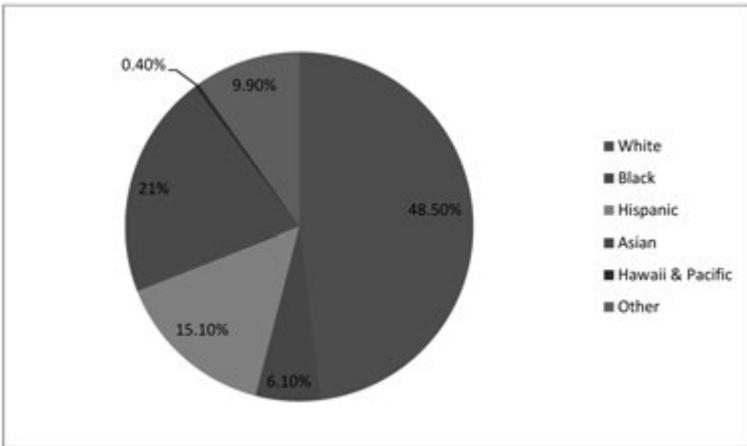
1970



1980



2000



参照：Association of Bay Area Governments, accessed October 9, 2017, <http://www.bayareacensus.ca.gov/counties/SanFranciscoCounty50.htm>.

脚注

- 1 “The ethnic studies field is unique as an educational experience that redefines the lives of people of color from their own perspectives. This is implemented through the cooperative efforts of students, faculty, and members of the community invested in meaningful education who provide resources and curricula to the university and the community at-large.”
“*College of Ethnic Studies*,” San Francisco State University, accessed August 25, 2017. <https://ethnicstudies.sfsu.edu/content/about-college-ethnic-studies>.
- 2 “TEXT of AB 2016 as signed into law September 13, 2016,” Ethnic Studies Now, accessed October 16, 2017, http://www.ethnicstudiesnow.com/text_of_ab_2016_as_signed_into_law_on_september_13_2016.
- 3 Donovan J. Ochs, Richard J. Jensen, David P. Schulz John W. Bowers. *The Rhetoric of Agitation and Control: 3rd (Third) edition*. (Illinois: Addison-Wesley Publishing Company Inc, 2006), 85.
- 4 Daryl, Maeda J, *Rethinking Asian American Movement* (New York: Routledge, 2012), 29.
- 5 権瞳 『『大衆』のための高等教育—サンフランシスコ州立カレッジの学生紛争とマスター・プラン—』『プール学院大学研究紀要』第49号(2009年)、141頁。
- 6 Maeda, *Rethinking Asian American Movement*, 28.
第一章 1960年代の世界とアメリカ
- 7 サンフランシスコ州立大学における学生運動については、以下参照。
“SFSC Student-led Strike Materials in the University Archives: additional page,” LibGuides at San Francisco State University, accessed February 8, 2016. <http://libguides.sfsu.edu/sfscstrikechron>.

- 8 西田慎、梅崎透編著『グローバルヒストリーとしての「1968年」—世界が揺れた転換期—』ミネルヴァ出版、2015年、9頁。
- 9 同上。
- 10 トッド・ギトリン著、疋田三良、向井俊二訳『60年代のアメリカ—希望と怒りの日々』彩流社、1993年、24頁。
- 11 1960年代のアメリカ国内の状況については、以下参照。
トッド・ギトリン著、疋田三良、向井俊二訳『60年代のアメリカ—希望と怒りの日々』彩流社、1993年。有賀夏紀『20世紀のアメリカ〈下〉1945年～2000年』中公新書、2002年。チャールズ・A・ライク著、邦高忠二訳『緑色革命』早川書房、1971年。
- 12 第二次世界大戦後のアメリカ社会における物質的「豊かさ」については、以下参照。
有賀夏紀『20世紀のアメリカ〈下〉1945年?2000年』中公新書、2002年。チャールズ・A・ライク著、邦高忠二訳『緑色革命』早川書房、1971年。
- 13 ギトリン、24頁。
- 14 同上。
- 15 梅崎透「アメリカ運動の一盛衰と文化変容」、西田慎、梅崎透編著『グローバルヒストリーとしての「1968年」—世界が揺れた転換期—』ミネルヴァ出版、2015年、136頁。
- 16 1960年5月の下院反米活動委員会への抗議により全国的に知られるようになる。政治活動、市民権、死刑廃止、農場労働、キューバ革命などについても積極的な活動を行っている。Paul Jacobs and Saul Landau, *The New Radicals' - A Report with Documents-*, (New York: Vintage Books, 1966), 94-96.
- 17 新左翼については、以下参照。西田、梅崎『グローバルヒストリーとしての「1968年」—世界が揺れた転換期—』「第3章 新左翼の台頭」ミネルヴァ出版、2015年。
- 18 学生非暴力調整委員会の結成については、以下参照。有賀夏紀『20世紀のアメリカ〈下〉1945年～2000年』中公新書、2002年。チャールズ・

- A・ライク著、邦高忠二訳『緑色革命』早川書房、1971年。
- 19 梅崎、137頁。
- 20 芹沢功「アメリカの学生の政治運動」『海外事情』第17号(1969)42-43頁。
- 21 ベトナム反戦運動については、以下参照。NHKスペシャル「新・映像の世紀」プロジェクト編『NHKスペシャル 新・映像の世紀大全』NHK出版、2017年。有賀夏紀『20世紀のアメリカ〈下〉1945年～2000年』中公新書、2002年。チャールズ・A・ライク著、邦高忠二訳『緑色革命』早川書房、1971年。トッド・ギトリン著、足田三良、向井俊二訳『60年代のアメリカー希望と怒りの日々』彩流社、1993年。
- 22 SFSCにおける「1968年前後」は、本論文第三章を参照。1960年代のSFSCとサンフランシスコは、以下参照。Daryl Joji Maeda, *Rethinking Asian American Movement* (New York: Routledge, 2012), Chapter 2, 3. “SFSC Student-led Strike Materials in the University Archives: additional page,” LibGuides at San Francisco State University, accessed February 8, 2016, <http://libguides.sfsu.edu/sfscstrikechron>.
- 23 ネイサン・ヘアは、オクラホマ州出身のアフリカン・アメリカン・スタディーズの学者である。SFSCに雇用される前はワシントンのハーワード大学で社会学の准教授として教鞭に立っていた。その当時の教え子には、ストークリー・カーマイケル (Stokely Carmichael) がいる。ヘアは、後に全米初のブラック・スタディーズ・プログラムのコーディネーターとして注目され、「マイノリティ・スタディズ (Minority Studies)」という名称を「エスニック・スタディーズ (Ethnic Studies)」に変更した人物である。そのため、「ブラック・スタディーズの父」として知られている。“Nathan Hare,” *The History Makers*, accessed October 22, 2016, <http://www.thehistorymakers.com/biography/nathan-hare-38>.
- 24 ジョージ・メイソン・マレーについては、以下参照。William H.

Orrick and National Commission on the Cause and Prevention of Violence, *Shut It Down! A College in Crisis: San Francisco State College, October 1968-April 1969; A Report to the National Commission on the Causes and Prevention of Violence* (Washington: U. S. G. P. O., 1969), 30-33.

25 “We maintain that political power comes through the barrel of a gun. And if you want campus autonomy, if the students want to run the college, if the cracker administrators don’t want to go for it, then you control it with the gun. We are slaves and the only way to become free is to kill all the slave masters.

”Jason Michael Ferreira, *“All Power to the People: A Comparative History of Third World Radicalism in San Francisco, 1968-1974,”* (Ph. D. diss., University of California, Berkeley, 2003), 115.

26 権、143 頁。

27 1930 年から 1970 年までのサンフランシスコ市の人口は以下のとおり。
 (1930 年 634,394 人、1940 年 634,536 人、1950 年 775,357 人、1960 年 740,316 人、1970 年 775,357 人) “Bay Area Census/San Francisco City and County,” Association of Bay Area Governments, accessed October 9, 2017, <http://www.bayareacensus.ca.gov/counties/SanFranciscoCounty50.htm>.

28 資料 I 参照。

29 1980 年は白人 59.2%、黒人 12.7%、ヒスパニック (Spanish Origin)12.4%、中国系 12.1% フィリピン系 5.7% 日系 1.7%、2010 年は白人 48.5%、アジア系 33.3%、ヒスパニック 15.1%、黒人 (Black or African American) 6.1%。 “Bay Area Census/San Francisco City and County,” Association of Bay Area Governments, accessed October 9 2017, <http://www.bayareacensus.ca.gov/counties/SanFranciscoCounty50.html>.

30 Maeda, *Rethinking Asian American Movement*, 28.

31 William H. Orrick and National Commission on the Cause and

Prevention of Violence, *Shut It Down! A College in Crisis: San Francisco State College. October 1968 ? April, 1969; A Report to the National Commission on the Causes and Prevention of Violence*, 75.

32 Meredith Eliassen, *San Francisco State University Campus History* (California: Arcadia Publishing, 2007).

33 高等教育在籍者数 (1899年 - 1900年 237,600人、1900年 - 1910年 355,200人) 江原武一『現代アメリカの大学—ポスト大衆化を目指して—』玉川大学出版部、1994年、37頁。

34 Eliassen, *San Francisco State University Campus History*, 12.

35 Ibid., 13.

36 “San Francisco State University College Portrait,” College Portrait, accessed January 6, 2018, <http://www.collegeportraits.org/CA/SF-State/characteristics>.

37 William H. Orrick and National Commission on the Cause and Prevention of Violence, *Shut It Down! A College in Crisis: San Francisco State College. October 1968-April 1969; A Report to the National Commission on the Causes and Prevention of Violence*, 75.

38 Eliassen, *San Francisco State University Campus History*, 14.

39 Ibid., 26.

40 Ibid., 35.

41 Ibid., 35.

42 高等教育在籍者数 (1929年 - 1930年 約1,100,000人、1939年 - 1940年 約1,494,200人、1949年 - 1950年 約2,659,000人、1960年 約3,582,700人 1965年 約5,526,300人、1970年 約8,581,000、1980年 約12,097,000人) 江原武一『現代アメリカの大学—ポスト大衆化を目指して—』玉川大学出版部、1994年、37頁。

43 バーダッチについては、以下参照。“Wyness Athletic Director At San Francisco State,” *New York Times*, May 14, 1967.

44 Eliassen, *San Francisco State University Campus History*, 69.

- 45 Ibid., 69.
- 46 Ibid., 89.
- 47 権、143 頁。
- 48 Maeda, *Rethinking Asian American Movement*, 2012, 28.
- 49 “I saw more black faces in a college classroom than I had ever seen in my life. I never walked into classroom that had less than 10 percent... I often had 20 percent, and that was pretty startling in 1956 in a college classroom.”(Orrick and National Commission on the Cause and Prevention of Violence, *Shut It Down! A College in Crisis: San Francisco State College. October 1968-April, 1969; a Report to the National Commission on the Causes and Prevention of Violence*, 75.
- 50 権瞳、喜多村和之はマスター・プランによる有色人種学生の減少を主張している。権瞳『『大衆』のための高等教育—サンフランシスコ州立カレッジの学生紛争とマスター・プラン—』『プール学院大学研究紀要』第 49 号 (2009 年)。喜多村和之『『質』の保証—カリフォルニア・マスタープランの事例にふれて—』『高等教育研究紀要』第 18 号 (2000 年)。
- 51 マスター・プランの概要については、以下参照。California State Department of Education, *A Master Plan for Higher Education 1960 - 1975*, (Sacramento: California State Department of Education, 1960).
- 52 註 16 参照。
- 53 権、147 頁。
- 54 同上。
- 55 カリフォルニア大学群と州立大学群の大きな差は教育水準である。カリフォルニア大学群には学士、修士、博士課程までが設置されていたが、州立大学群には学士、修士課程しか設置されていなかった。California State Department of Education, *A Master Plan for Higher Education 1960 - 1975*.

56 Orrick and National Commission on the Cause and Prevention of Violence, *Shut It Down! A College in Crisis: San Francisco State College, October 1968-April, 1969; A Report to the National Commission on the Causes and Prevention of Violence*, 75.

57 “Now we are talking about 1966, and I like a lot of other persons still saw 10-15-20 percent of black faces, when in fact it was 4-5percent black faces… I was still kind of laboring under the notion that nothing had happened. San Francisco State had been the place of many doors- was a place almost anyone could get in… by 1965-66 we weren’t that college at all. We were taking off a higher percentage group. The ghetto lad didn’t have a chance to get to san Francisco State.” (Ibid., 75.)

58 Ibid., 76.

59 権、150頁。

60 Orrick and National Commission on the Cause and Prevention of Violence, *Shut It Down! A College in Crisis: San Francisco State College, October 1968-April, 1969; A Report to the National Commission on the Causes and Prevention of Violence*, 76.

61 Ibid., 75.

62 Ibid., 75.

63 Ibid., 1-2.

64 “College of Ethnic Studies,” San Francisco State University, accessed November 22, 2017, <http://ethnicstudies.sfsu.edu/home5>.

65 SFSCにおける学生運動の研究は、以下の書物、論文を参考。Orrick, William H. Jr and National Commission on the Cause and Prevention of Violence, *Shut It Down!. A College In Crisis: San Francisco State College. October 1968 - April, 1969. A Report to the National Commission on the Causes and Prevention of Violence*. (Washington, D. C. : U. S. G. P. O.), 1969. Daryl Joji Maeda, *Rethinking Asian American*

- Movement, New York: Routledge, 2012. Ferreira, Jason Michael. "All Power to the People: A Comparative History of Third World Radicalism in San Francisco, 1968-1974." PhD diss., University of California, Berkley, 2003.
- 66 権、147 頁。
- 67 学生運動とコミュニティとの関連については、以下参照。Daryl J. Maeda, *Rethinking Asian American Movement* (New York: Routledge, 2012).
- 68 学生による呼びかけは、以下参照。"Strike Documents", "Strike Posters," The SF State Strike Collection, accessed March 7, 2015, <https://diva.sfsu.edu/collections/strike>.
- 69 Maeda, *Rethinking Asian American Movement*, 43.
- 70 Ibid.
- 71 Ibid.
- 72 「モデル・マイノリティ」を信奉していたのは、日系アメリカ人二世に多く見られる。学生運動中にはこれが原因で日系アメリカ人市民協会は内部崩壊状態に陥る危機に直面する。
- 73 Maeda, *Rethinking Asian American Movement*, 42.
- 74 William H. Orrick and National Commission on the Cause and Prevention of Violence, *Shut It Down! A College in Crisis: San Francisco State College. October 1968 - April, 1969; A Report to the National Commission on the Causes and Prevention of Violence*, 98.
- 75 Ibid.
- 76 Ibid., 41-42.
- 77 西部付加コミュニティ組織については、以下参照。"Western Addition Community Organizations (WACO)," *San Francisco Bay View* (San Francisco), March 21, 2010.
- 78 "We maintain that political power comes through the barrel of a gun. And if you want campus autonomy, if the students want to

run the college, if the cracker administrators don't want to go for it, then you control it with the gun. We are slaves and the only way to become free is to kill all the slave masters." Jason Michael Ferreira, Ferreira, "*All Power to the People: A Comparative History of Third World Radicalism in San Francisco, 1968-1974*," 115.

79 William H. Orrick and National Commission on the Cause and Prevention of Violence, *Shut It Down! A College in Crisis: San Francisco State College. October 1968 - April, 1969; A Report to the National Commission on the Causes and Prevention of Violence*, 99.

80 "List of 15 Demands Part I" San Francisco State University J. Paul Library, accessed March 7, 2015, <https://diva.sfsu.edu/collections/strike/bundles/187915>.

81 "Intercollege Chinese for Social Action -Official Statement- December 26, 1968," The SF State College Strike Collection, accessed October 7, 2017, <https://diva.sfsu.edu/collections/strike/bundles/187908>.

82 Ibid.

83 Ibid.

84 "Intercollege Chinese for Social Action -Official Statement- December 26, 1968," The SF State College Strike Collection, accessed October 7, 2017, <https://diva.sfsu.edu/collections/strike/bundles/187908>.

85 Ibid.

86 "Brothers and Sisters I," The SF State College Strike Collection, accessed November 30, 2017, <https://diva.sfsu.edu/collections/strike/bundles/187993>.

87 Ibid.

88 Ibid.

89 "A Position Paper on The Proposed Institute of Japanese

- American Studies and The School of Ethnic Studies ***** Asian American Political Alliance,” The SF State College Strike Collection, accessed November 30, 2017, <https://diva.sfsu.edu/collections/strike/bundles/187908>.
- 90 Ibid.
- 91 Maeda, Rethinking Asian American Movement, 33.
- 92 中国系アメリカ人、フィリピン系アメリカ人も方針説明書の中に「教育を通じたコミュニティの問題解決」を述べている。“Intercollege Chinese for Social Action ?Position Paper”, “The SF State College Strike Collection, accessed October 7, 2017, <https://diva.sfsu.edu/collections/strike/bundles/187992>.
- 93 “Philippine Studies: Proposal Courses,” The SF State College Strike Collection, accessed November 30, 2017, <https://diva.sfsu.edu/collections/strike/bundles/187943>.
- 94 Ibid.
- 95 Ibid.
- 96 Daryl Joji Maeda, *Chains of Babylon - The Rise of Asian American*. (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2009), 66.
- 97 Ferreira, “*All Power to The People: A Comparative History of Third World Radicalism in San Francisco, 1968-1974*”, 135.
- 98 Ibid., 132.
- 99 Ibid., 123.
- 100 Ibid., 125.
- 101 Ibid., 134
- 102 Ibid.
- 103 Ibid., 135.
- 104 Staff Report, 37-40; Barlow and Shapiro, *An End to Silence*, 223, 223; Kawagueuzian, *Blow It Up!*, 116-118.
- 105 “Declaration of Emergency,” The SF State College Strike

Collection, accessed 30th October 2017, <https://diva.sfsu.edu/collections/strike/bundles/187927>.

106 Ferreira, “*All Power to The People: A Comparative History of Third World Radicalism in San Francisco, 1968-1974*”, 136.

107 Ibid., 136.

108 Ibid., 136.

109 “Declaration of Emergency,” The SF State College Strike Collection, accessed 30th October 2017, <https://diva.sfsu.edu/collections/strike/bundles/187927>.

110 Ferreira, “*All Power to The People: A Comparative History of Third World Radicalism in San Francisco, 1968-1974*,” 138.

111 Ibid., 137.

112 Ibid., 138.

112 Ibid., 137.

113 “Confrontations & Hayakawa on the sound truck,” San Francisco Bay Area Television Archive, accessed December 21, 2017, <https://diva.sfsu.edu/collections/strike/bundles/187201>.

114 TWLFによる集会で音響機材が使用されたが、この機材を搭載していたトラックにハヤカワが乗り込み、配線などを引き抜いた。このことから、「サウンドトラック事件 (Sound Truck Incident)」と呼ばれている。“SFSC Student-led Strike Materials in the University Archives: additional page,” San Francisco State University Leonard Library, accessed October 2, 2016, <http://libguides.sfsu.edu/sfscstrikechron>.

115 Ferreira, “*All Power to The People: A Comparative History of Third World Radicalism in San Francisco, 1968-1974*,” 141.

116 Edward Dyanand Asregadoo “*Revolution Interrupted: Chronicling and Comparing Student Protest Movements at Stanford University, San Francisco State College, And The University of California, Berkley, 1964-1970*” (PhD

- diss., University of Pennsylvania, 2000), 178.
- 117 Ferreira, “*All Power to The People: A Comparative History of Third World Radicalism in San Francisco, 1968-1974*,” 139-140.
- 118 Samuel I, Hayakawa, interview by Helen Winston, Tape recording, San Francisco, California, April 6, 1988. Archives and Special Collections, San Francisco State University.
- 119 Ibid.
- 120 Asregadoo, “*Revolution Interrupted: Chronicling and Comparing Student Protest Movements at Stanford University, San Francisco State College, and The University of California, Berkley, 1964-1970*,” 179.
- 121 Ibid.
- 122 Ibid.
- 123 Maeda, *Chains of Babylon - The Rise of Asian American*, 62.
- 124 Ibid., 62.
- 125 *San Francisco Chronicle*, December 6, 1968.
- 126 Min Zhou, *Contemporary Asian American (third edition)*, (New York: New York University Press, 2016), 38.
- 127 Maeda, *Chains of Babylon - The Rise of Asian American*, 170.
- 128 *Los Angeles Times*, May 4, 2015.
- 129 “Clifford Uyeda (1917 - 2004) Political activist,” Discover Nikkei, accessed December 10, 2017, <http://www.discovernikkei.org/en/interviews/profiles/112/>.
- 130 *Rafu Shimpo* (Los Angeles), February 15, 2013.
- 131 Maeda, *Chains of Babylon - The Rise of Asian America*, 170.
- 132 ハヤカワ支持者の多くが日系二世であったことは確かである。しかし、二世の中にも反ハヤカワ派の人びとがいたことは確かである。支持者を分析することで世代間の対立を呈するようにとらえられるが、実際には世代間の対立とはいいいがたい。Maeda, *Chains of Babylon - The Rise of Asian American*, 62.

- 133 サミュエル・イチエ・ハヤカワ著、大久保忠利訳『思考と行動における言語学』岩波書店、1985年。
- 134 *Hokubei Mainichi*, January 1, 1968.
- 135 “Hayakawa & Reagan in Sacramento,” San Francisco Bay Area Television Archive, accessed November 22, 2017, <https://diva.sfsu.edu/collections/strike/bundles/187288>.
- 136 Maeda, *Chains of Babylon - The Rise of Asian America*, 67.
- 137 Maeda, *Rethinking Asian American Movement*, 65.
- 138 Ibid.
- 139 *San Francisco Chronicle*, December 4, 1968.
- 140 Maeda, *Rethinking Asian American Movement*, 65.
- 141 Ibid.
- 142 Maeda, *Chains of Babylon - The Rise of Asian American*, 67.
- 143 Ibid.
- 144 Ibid., 66.
- 145 “Hayakawa, Samuel Ichiye (1906 - 1992),” Biographical Directory of the United States Congress, accessed November 22, 2017, <http://bioguide.congress.gov/scripts/biodisplay.pl?index=h000384>.
- 146 Maeda, *Chains of Babylon - The Rise of Asian American*, 67.
- 147 “Nisei Should Be More Active in Helping Other Minorities,” *The San Diego Union*, May 3, 1969.
- 148 権、151頁。

参考文献

一次史料

<書物>

American Council of Education 1989 ~ 1990. *Fact Book on Higher Education*. New York: Macmillan Publishing Company, 1989.

California State Department of Education. *A Master Plan for Higher Education 1960 - 1975*. Sacramento: California State Department of Education, 1960.

Orrick, William H. Jr, and National Commission on the Cause and Prevention of Violence. *Shut It Down! A College in Crisis: San Francisco State College. October 1968 - April, 1969; A Report to the National Commission on the Causes and Prevention of Violence*. Washington, D. C. : U. S. G. P. O., 1969.

Snyder, Thomas D., and National Center for Education Statistics. *120 Years of American Education: A Statistical Portrait*. Washington, D. C. : U. S. Department of Education Office of Educational Research and Improvement, 1993.

<新聞>

Daily Gator

Phoenix

The Daily California

The Black Panther

Hokbei Mainichi

Rafu Shinpo

New York Times

San Francisco Chronicle

Los Angeles Times

The San Diego Union Tribune

<インターネットサイト>

“SFSC Student-led Strike Materials in the University Archives,” SF State Strike Collection, accessed June 2, 2015. <https://diva.sfsu.edu/collections/sfbatv/2582>.

“The San Francisco State College Strike Collection,” Leonard Paul Library, accessed June 2, 2015. <http://jplweb.sfsu.edu/about/collections/strike>.

“San Francisco Bay Area Television Archive,” SF State Strike Collection, accessed June 2, 2015. <https://diva.sfsu.edu/collections/sfbatv/2582>.

“On Strike! Shut it down,” An Interview with Helene Whitson on the San Francisco College Strike and Strike Collection, accessed October 22, 2015, <https://erea.revues.org/3182>.

二次文献

<書物>

西田慎、梅崎透編著『グローバルヒストリーとしての「1968年」—世界が揺れた転換期—』ミネルヴァ出版、2015年。

油井大三郎編『越境する1960年代—米国・日本・西欧の国際比較—』彩流社、2012年。

トッド・ギトリン（疋田三良、向井俊二訳）『60年代のアメリカ—希望

- と怒りの日々』彩流社、1993年。
- 江原武一『現代アメリカの大学—ポスト大衆化を目指して—』玉川大学出版部、1994年。
- 竹林修一著『カウンター・カルチャーのアメリカ—希望と失望の1960年代—』大学教育出版、2014年。
- 諏訪優『ビート・ジェネレーション』紀伊国屋書店、1965年。
- 山形浩生著『たかがバロウズ本。』大村書店、2003年。
- Barlow, William and Peter Shapiro. *An End to Silence: The San Francisco Student Movement in the 60s*. New York: Pegasus, 1971.
- Bracey Jr, John H., Sonia Sanchez, and James Smethurt. *SOS—Calling All Black People: A Black Arts Movement Reader*. Massachusetts: University of Massachusetts Press, 2014.
- Boroughf, Benjamin L. *Individual Autonomy and the Work of Resistance: How Authors of the 1950s Reject State Absorption through Imagination and Reaffirmation of the Body*. Michigan: Western Michigan University Press, 2007.
- Eliassen, Meredith. *San Francisco State University Campus History*. California: Arcadia Publishing, 2007.
- Gitlin, Todd. *The Sixties: Years of Hope, Days of Rage*, New York: Bantam Books, 1987.
- Hirabayashi, Gordon K. *A Principled Stand—The Story of Hirabayashi V. United State*, Seattle: University of Washington Press, 2013.
- Jacobs, Paul, and Saul Landau. *The New Radicals': A Report with Documents*. New York: Vintage Books, 1966.
- Luis Martinez, Manuel. *Countering the Counterculture: rereading postwar American dissent from Jack Kerouac to Thomas Rivera*. Madison: University of Wisconsin Press, 2003.
- Maeda, Daryl J. *Rethinking Asian American Movement*. New York: Routledge, 2012.

- Maeda, Daryl J. *Chains of Babylon - The Rise of Asian American*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2009.
- Murray, Alice Yang. *Historical Memories of the Japanese American Internment and the Struggle for Redress*. Stanford: Stanford University Press, 2008.
- Nomura, Gordon M. *Nikkei - In the Pacific Northwest*, Seattle and London: University of Washington Press, 2005.
- Ongiri, Amy Abugo. *Spectacular Blackness*. Virginia: The University of Virginia Press, 2009.
- Parrish, Richard Jeremy. *William S. Burroughs' Naked Lunch: Drug, Satire, and the Metaphor of Control*. California: the University of North Carolina, 2007.
- Reich, Charles A. *The Greening of America*. Tokyo: Hayakawa Shobo, 1970.
- Wei, William. *The Asian American Movement*. Philadelphia: Temple University Press, 1993.

<論文>

- 権瞳「『大衆』のための高等教育—サンフランシスコ州立カレッジの学生紛争とマスター・プラン—」『プール学院大学研究紀要』第49号(2009年)、141-153頁。
- 石田剛「バークレーにおける学生運動(1964)の展開過程に関する研究」『日本社会学会』第23号(1973年)、46-61頁。
- 小杉亮子「1960年代アメリカの学生運動の形成要因; バークレー闘争を例に」『社会学年報』第41号(2012年)、67-77頁。
- 玄由美子「多文化社会におけるエスニック・スタディーズの行方—カリフォルニア大学バークレー校から—」『大阪大学言語文化学』第9号(2000年)、267-277頁。

- 芹沢功「アメリカの学生の政治運動」『海外事情』第17号(1969年)、40-46頁。
- 佐々木隆「意識への序章ービート・ジェネレーションと1960年代ー」『同志社アメリカ研究』第19号(1983年)、49-70頁。
- 喜多村和之「『質』の保証ーカリフォルニア・マスタープランの事例にふれてー」『高等教育研究紀要』第18号(2000年)、82-92頁。
- 本多千恵「日系アメリカ人の適応に関する一考察:『成功物語』再考」『慶応大学大学院社会学研究科紀要:社会学心理学教育学』No.31(1991年)、9-19頁。
- Asregadoo, Edward Dyanand. "Revolution Interrupted: Chronicling and Comparing Student Protest Movements at Stanford University, San Francisco State College, And The University of California, Berkley, 1964-1970." PhD diss., University of Pennsylvania, 2000.
- Cook, Tracy Ann. "Power and Resistance: Berkley's Third World Liberation Front Strikes." PhD diss., University of San Francisco, 2001.
- Casanova, Stephen. "The Ethnic Studies Movement: The Case of the University of Madison, Wisconsin." PhD diss., University of Wisconsin-Madison, 2001.
- Ciernick, Helen Marie. "Student Life on Catholic-College Campus in The San Francisco Bay Area During The 1960s." PhD diss., Catholic University of America, 2003.
- Ferreira, Jason Michael. "All Power to The People: A Comparative History of Third World Radicalism in San Francisco, 1968-1974." PhD diss., University of California-Berkley, 2003.
- Fugman, James Stanley. "The Legality of Strikes and The Issuance of Injunctions on Public Education in The State of California." PhD diss., University of San Francisco, 1983.

<一般誌>

神館和典著『1969年を觀ろ！1969年を聴け！』「GOETH」（幻冬舎）2011年1月号。

リチャード・ヘル（浜野アキオ訳）『わがバロウズ』「ユリイカ 特集バロウズのいない世界」1997年第29巻14号。

ジャック・ケルアック（中上哲夫訳）『夢の本』「ユリイカ 特集ケルアックービートの衝撃」1999年第31巻12号。